

平成 28 年度環境省地域活性化に向けた 協働取組の加速化事業

[プロジェクト・マネジメントの評価]と[協働ガバナンスの評価]に焦点を置いて

— 最終報告書 —



2017年3月31日

研究代表者: 佐藤真久(東京都市大学)

事務局: 一般社団法人環境パートナーシップ会議(EPC)

－平成 28 年度環境省地域活性化に向けた協働取組の加速化事業－
最終報告書

目次

はじめに.....	3
第一章:導入.....	5
1. はじめに.....	5
2. 採択された協働取組.....	5
3. 検討会実施報告.....	9
4. 本報告書の章構成.....	11
第二章:実証研究編 「プロジェクト・マネジメント」と「協働ガバナンス」の評価.....	13
1. はじめに.....	13
2. 協働ギャザリング 2017(年度末報告会)の開催.....	13
3. 「プロジェクト・マネジメント」の評価(個別案件).....	15
4. 「協働ガバナンス」の評価(個別案件).....	30
5. おわりに.....	39
おわりに.....	40

<付録>

付録 1:平成 28 年度協働取組加速化事業(公募要領・申請書).....	付 1
付録 2:平成 28 年度協働取組加速化事業(協働取組カレンダー・中期計画).....	付 16
付録 3:協働ギャザリング 2017(年度末報告会)―「プロジェクト・マネジメント」と「協働ガバナンス」の評価(個別案件).....	付 81
付録 4:「中間支援機能」チェックリスト(改訂版 Version4).....	付 105
付録 5:協働ハンドブック『協働の設計』.....	付 109

はじめに

「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」(以下、「法」)が 2012 年 10 月に完全施行され、2013 年 4 月より完全実施となった。法に基づく協働取組を促進するためには、協定の締結や具体的取組などについて、参考となる先導的な事例を形成し、協働取組のノウハウを蓄積・共有することが重要である。本協働取組加速化事業は、民間団体、企業、自治体等の異なる主体による協働取組を実証するとともに、地球環境パートナーシッププラザ(以下、GEOC/EPO)及び地方環境パートナーシップオフィス(以下、地方 EPO)が設置する支援事務局のアドバイスを受けつつ、協働取組のプロセスを明らかにし、協働取組を推進していくうえでの様々なノウハウの蓄積や留意事項等を明らかにしていくことを目的としている。

2013 年度(平成 25 年度)¹、2014 年度(平成 26 年度)²、2015 年度(平成 27 年度)³につづき、2016 年度(平成 28 年度)においては、特定の地域を対象とした地方事業(16 取組)の本協働取組加速化事業が実施された。本協働取組加速化事業の実施にあたっては、採択団体、地方 EPO、GEOC/EPO、環境省地方環境事務所(REO)、検討会委員、アドバイザー委員会委員、環境省、などの多くの関係者による連携・協働のプロセスを経ている。本協働取組加速化事業の特徴として、本協働取組加速化事業を単なる事業として位置付けるのではなく、環境保全に関わるすべての関係者(個人、組織、市民)の能力の向上を目的とした「知見の蓄積」(様々なノウハウの蓄積や留意事項の明確化)を行っている点がある。従来の事業であれば、学術的研究が、このような事業型の取組に深く関与することはなかったが、本協働取組加速化事業においては、現場における協働取組の推進を行うことと並行して検討会を立ち上げ、学術的研究事例も共有しつつ、「実践と理論の反復」に基づく知見の蓄積を行っている。

本最終報告書では、【はじめに／第一章：導入】において、本事業の概要と採択団体の協働取組概要が明記されているとともに、【第二章：実証研究編—個別案件・全体評価】では、年度末に開催された協働ギャザリング 2017(年度末報告会)に基づき、論点が整理されている。2013 年度(平成 25 年度)、2014 年度(平成 26 年度)、2015 年度(平成 27 年度)、2016 年度(平成 28 年度)における本協働取組事業への参画を通して痛感したことは、環境保全活動の協働取組の推進は容易ではないということである。地域の政策課題に基づく自治体を巻き込む協働(「政策協働」)や、生命地域(山系や流域、沿岸域など)における行政区分・監督官庁に基づく区分を越えた協働取組は、その重要性は理解されているものの、実務レベルでは様々な障害が生じている。このような

¹ 佐藤真久, 2014, 「平成 25 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業—[プロジェクト・マネジメントの評価]と[中間支援組織の機能と役割]に焦点を置いて」, 平成 25 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業, 『最終報告書』

² 佐藤真久, 2015, 「平成 26 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業—[協働ガバナンスの事例分析]と[社会的学習の理論的考察]に焦点を置いて」, 平成 26 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業, 『最終報告書』

³ 佐藤真久, 2016, 「平成 27 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業—[継続案件の多角的考察]と[協働ガバナンスの事例比較]に焦点を置いて」, 平成 27 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業, 『最終報告書』

最終報告書を通して、本協働取組加速化事業における知見の蓄積を行ったことは評価すべきであるが、今後も継続的な知見の蓄積を行うことなしには、「持続可能で包摂的な地域づくり」に関する深い知見を構築することは不可能である。その一方で、2015年度(平成27年度)に引き続き、2016年度(平成28年度)における本協働取組加速化事業では、採択団体、**地方EPO**、**GEOC/EPO**、における継続的な議論を通して蓄積された知見を、『協働の設計～環境課題に立ち向かう場のデザイン』と題するハンドブックとして発行をすることができた(【付録5:協働ハンドブック『協働の設計』】を参照)。これらハンドブックは、より協働の現場で活用できるよう、具体的な事例を取り扱いながら、その協働取組の裏舞台を紐解きつつ、参画した主体の関係性変化や協働ガバナンスの効果的発展にむけた「**運営制度の設計**」について分かりやすく記述されているところに特徴がある。また、協働取組を推進する上で調整役となる「**中間支援機能**」についても考察されており、3年間の実践と理論の反復の成果の一つとして評価できるものである。

グローバル化時代における「双子の基本問題」(環境問題と貧困・社会的排除問題)の同時的解決と、「**協働ガバナンス**」を支え機能させる「**社会的学習**」の深化に資する協働取組は、「持続可能で包摂的な地域社会づくり」という、本質的な課題に向き合う重要な取組であり、持続可能な開発のための教育(ESD)の根幹を支えるものであると言えよう。

本最終報告書が、上述する本質的な課題に向けた知見の蓄積の一助になれば幸いである。

2017年(平成29年)3月31日

佐藤真久

第一章：導入

1. はじめに

環境省は2012年10月に完全施行された、「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律」に基づく協働取組を促進するため、協定の締結や具体的取組などについて、参考となる先導的な事例を形成し、協働取組のノウハウを蓄積・共有することを目的とした「地域活性化に向けた協働取組の加速化事業」（以下、協働取組加速化事業）の募集を行った。公募対象事業は、特定の地域を対象とした地方事業について、各取組の進行状況に合わせ、AタイプとBタイプに分けて応募がなされた。

- Aタイプ：すでに一定程度の協働取組の実績はあるが、協働取組の成功事例にまで発展が期待される事業。
- Bタイプ：法に基づく協定等の締結や連携を越えた協働取組を展開するには至っていない事業。

2. 採択された協働取組

選考の結果、下記の協働取組が本取組事業として採択され、実施された。活動概要を以下に記す。公募概要については、【付録 1：平成 28 年度協働取組加速化事業（公募要領・申請書）】を参照されたい。

(1)北海道地方



大沼環境保全計画改正に向けたラムサール地域協働の 加速化事業 一般財団法人 北海道国際交流センター

函館の奥座敷ともいわれる七飯町の大沼は2012年に「ラムサール条約」に登録されました。重要な自然を次世代に残すため、1997年に策定した「大沼環境保全計画」改定の機を捉え、地域の関係主体が有識者等と協働して住民の声を抽出しながら、ラムサール条約3つの柱「保全・再生」、「賢明な利用」、「学習・交流」を中心とした保全計画の策定を目指します。また同時に、北海道新幹線開業等による地域振興と環境保全の両立を目指した協働体制を進めます。



「人と海鳥と猫が共生する天売島」の実現を 目指した協働取組 「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会

2014年より「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会は、海鳥保護などを目的として、島内で増加したノラネコの捕獲、島外搬出と馴化・譲渡に協働で取り組んできました。ノラネコが減少した一方で、ドブネズミの視認や漁業などへの被害が発生し、ノラネコ対策に懸念を示す住民も出てきました。そこで本事業では、住民との対話の場の設置や学校での環境教育の実施等を通して島民及び関係者と「人と海鳥と猫が共生する天売島」のビジョンを共有し、ノラネコ対策の継続的な実施や飼いや猫の適正飼養の浸透等に取り組むとともに、島外の天売猫の飼主と島民との交流機会の創出等を通じ島の観光振興を目指します。

(2)東北地方



「社会復帰プログラム×森林保全」協働取組事業 Vol.2 一般社団法人 あきた地球環境会議

本事業では、「森林保全」と「引きこもりの就労支援」、2つの異なる取組を掛け合わせることで、秋田県の間伐材利用を進め、森林荒廃を防ぎ、働く世代の約10%が引きこもっているとされる藤里町の就労課題を解決する新たなモデルを展開しています。これまで、多様な主体と協働し、引きこもりの就労支援の一環として、未利用材を利用した「木ハガキ」等の製造・販売に取り組み、また、製造した木ハガキを活用し、木工製品の流通が森林保全には重要である点を学ぶ教育プログラムを構築・実施しました。本年度は、成果の継続性確保と地域特性やニーズに応じた多品目化、環境教育講座の拡充・実践を通じた定着を図ります。



鶴岡市三瀬地区 木質バイオマスで地域のエネルギーを 自給自足 鶴岡市三瀬地区自治会

山形県鶴岡市三瀬地区では地区内の大型施設を所有する団体と協働して、木質バイオマス利用のメリット・デメリットを検証。薪ストーブやボイラーを導入するための条件を明確にする。また、地区内で薪・チップなどの木質バイオマスを製造する株式会社、間伐作業を実施する株式会社等と協働し、効果的な森林資源の調達方法も検証する。人口減少に悩む地区と荒廃した山林をマッチングし、地域の森林から生じる熱エネルギーを地元の施設や一般家庭で使用する仕組みを構築することで雇用を生み、地域に活力を取り戻すことを目指す。

(3)関東地方



名栗の環境問題と地域課題を考える里山形自然学校の 構築と地域連携プロジェクト 駿河台大学

埼玉県飯能市名栗地区は森林率が90%を超える自然豊かな地区である一方で、少子高齢化の進行と若年層の流出により、高齢化が進み、限界集落化に直面しており、地域活力の低下が危惧されている地区となっています。空き家や放棄農地、手入れの行き届かない森林が増加し、有害獣が頻繁に出没するなど、悪循環が起っています。これらの問題解決に向けて、山間地域での小さな拠点としての里山型自然学校を構築し、これを回していくための仕組み作りとその周知を行います。

荒廃した地域資源の回復と未利用地の活用による環境 保全、経済資源の形成による辻又集落の再生事業

辻又地域協議会



新潟県南魚沼市の北西部で魚沼山地の深く狭い谷間にわずかに開けた平地にある辻又集落は自然豊かな場所にありながら過疎化、高齢化による担い手不足から、耕作放棄地の増加や山林の荒廃が進んでいます。本事業では荒廃した山林や耕作放棄地を整備、改修することによって里山の環境改善、地域資源の可能性の検証と地域資源活用計画づくりを行い、行政、NPO、地域おこし協力隊、大学などが地域住民と協働し主体的に動くことによって集落の持続を可能にする体制の基盤づくりを行います。

(4)中部地方



伊勢竹鶏物語～3R プロジェクト～Part2 一般社団法人四日市大学エネルギー環境教育研究会

四日市市の竹林荒廃と地力の低下による農業環境の変化を課題とし、竹林の管理保全活動により伐採された竹を竹粉にし、竹粉のたい肥による農業生産を可能にする地域資源の循環システムを構築します。竹粉を活用した有機農業による農作物のブランド化、生産消費システムの構築を目指します。本事業を学習教材として ESD(環境教育)の実施、人材育成を行います。



筑北村東条地区における里山交流促進計画 株式会社柳沢林業

筑北村の豊かな自然環境の価値を見直し、森林と人との共生関係を再構築し、里山を中心とした山村の暮らしを再生します。地元住民、都市住民、福祉・医療関係者の参加を得て、多様な人々が集いながら森を創出し、高齢者の健康促進、障がいをもつ人々、若者の就労支援、交流、連携の場やきっかけをつくります。

(5)近畿地方



近江八幡円山地域の自然と文化の保全と継承の活動 ヨシネットワーク

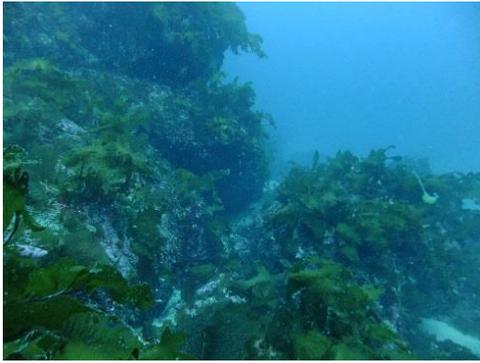
滋賀県・近江八幡円山地域は、ヨシ帯に囲まれた水郷の豊かな自然環境が保たれており、ヨシ産業を中心とした人々の生活と文化が古くから続いているところです。その保全にあたっては、ボランティアの個人・団体、企業、行政が、それぞれの特性を生かしながら活動を続けてきました。本事業を通じて、まちづくりの専門家や学生等の若い世代も加えた多様な主体が協働する場を作り、魅力的な環境学習・環境エコツアーを作成し、県内外に発信します。当地での交流の輪を広げ、自然と共生する持続可能な社会形成に向けた意識向上につなげます。



次世代へ引き継ぐ茨木のための環境教育の推進 bioa

大阪の茨木市域は、昔からの地域資源とこれから地域資源になる可能性を持つものが混在しています。たとえば、北部地域では、豊かな自然やキリシタン遺跡があり、そのすぐ隣では安威川ダムと新名神茨木北インターが建設中です。本事業では、こうした多様な地域資源を活用した教材づくり・プログラムづくりを試行しながら、環境 NPO、行政、地域、学校などによるプラットフォームにおいて、市民が求める環境教育のあり方について、対話を進めます。広く地域社会の関心を高めながら、市域の環境を次世代に引き継ぐための基盤をつくりま

(中国地方)



藻場再生と環境教育による活力ある地域づくり事業 有限会社 日本シジミ研究所

大山隠岐国立公園に位置する隠岐島は、世界ジオパークへの登録など、その豊かで貴重な自然環境を漁業や観光などの産業資源として活用しています。しかし沿岸の藻場(環境省重要湿地)では「藻場の衰退」が顕在化しつつあり、魚介類の生息場の減少など海域資質が低下、地域産業への影響も懸念されます。そこで、島根県隠岐の島町沿岸で漁業関係者、水産高校、研究者、行政らと藻場の回復に取り組むとともに、その過程・成果を活用した環境教育の教材づくりと人材の育成により、地域産業の担い手を育てる仕組みを構築していきます。



こどもたちの生きる力を育むための地域教育向上プロジェクト ～新たな宇部方式の構築～ 特定非営利活動法人 うべ環境コミュニティー

山口県宇部市は、かつて煤塵汚染克服のため産・官・学・民の情報共有と話し合いを重視した「宇部方式」と呼ばれる独自の対策を展開してきました。現在の環境問題等の解決にこの手法を持ち込み、地域の環境保全について、自ら学び、考え、行動する人づくりを通じて「民」の相対的な力量を高め、産官学との連携により「地域の教育力」を向上させるシステムの構築を目指すとともに、新たな指導者の発掘育成、子どもたち全体に行き届く環境学習機会の充実に重点を置いた環境学習拠点との連携による体制づくりを進めます。

(7)四国地方



松山市北条地域の生物多様性を支える～人材育成と 農地保全・交流人口拡大プロジェクト NPO 森からつづく道

「人の暮らしと自然との関わりが豊か」である松山市北条地域の魅力について市民が認識を深めて自ら発信することにより、交流人口が増加し、産業振興につながります。そして、里地・農地の維持により生物多様性が保全され、さらに地域の魅力が強まります。このプラスのスパイラルを協働によって生み出し、同地域の豊かな生物多様性が受け継がれることを目指します。具体的には子どもたちが身近な生き物への関心を高める「風早生きもん DAYS」、地元の食も含めたエコツアー、循環型農業見学ツアーなどの企画・運営を通して、小学校をはじめとするステークホルダーの増加と地元組織の活躍の場の拡大に取り組めます。

伊島の宝:ササユリの保全活動からはじめる、自然の恵みを 活かした持続可能な地域づくりプロジェクト 阿南市 KITT 賞賛推進会議



徳島県阿南市蒲生田岬から東に 6km。紀伊水道に浮かぶ四国最東端の島が「伊島」です。伊島は温暖な気候によって、亜熱帯植物などの希少植物を育てられました。「ササユリ」もその一つ。過去には収入源として重宝され、今ではシンボルとして島民に愛されています。この「ササユリ」を守るため、島では中学校を中心に保護活動が行われてきましたが、人口減少により活動の維持が難しくなっています。今回、継続的なササユリ保護を実施するため島全体の生物多様性の保全につなげることを目標とし、様々な主体とともに活動を始めました。今年度は、自然再生協議会の設置に向けた体制整備を目指します。

(8)九州地方



やんばる地域“美ら島・美ら海”連携プロジェクト-2 特定非営利活動法人 おきなわグリーンネットワーク

ヤンバルクイナやサンゴ礁など多様な生態系と豊かな自然を有している沖縄県本島北部地域において、陸域からの赤土等流出により、自然環境や地域産業等への影響が懸念されています。特に赤土等流出の割合が大きい農地での対策・普及について、昨年度実施した協働のノウハウを本年度は近隣地域まで広げ、農家だけでなく地域による協働、行政の横断的な連携をとおして、持続的に取組み支援する仕組みづくりの実現により、対策の普及・加速化を目指します。



放置竹林伐採と竹資源の有効活用を通じた、地域における 環境保全と地域活性化のための協働取組事業 特定非営利活動法人 筑後川流域連携倶楽部

筑後川流域では放置竹林の拡大に伴い、生物多様性への悪影響や土砂災害が発生する可能性が高まっていることから、放置竹林の拡大防止が求められています。本事業では、竹林伐採と観光を含む地域産業を組み合わせた取組について、多方面からの情報集積を行うとともに、伐採後の竹の利活用方法の企画又は開発等を試行的に行い、本課題への解決策を探ります。また、これらの試行的取組で得られた成果等が他地域で参照・活用されるよう、必要な情報を整理したアクションプラン(マニュアル)の作成やシンポジウムの開催を行います。

3. 検討会実施報告

本協働取組加速化事業においては、現場における協働取組の推進を行うことと並行して、全国事務局(GEOC/EPO)、アドバイザー委員会⁴、および検討会⁵を立ち上げ(写真 1-1)、学術的研究事例も共有しつつ、「理論と実践の反復」に基づく知見の蓄積を行っている。以下に検討会における概要と議題について明記をする(表 1-1;表 1-3)。本検討会においては、事業進捗報告、調整、知見共有が行われるとともに、『協働の設計～環境課題に立ち向かう場のデザイン』(図 1-1、【付録 5:協働ハンドブック『協働の設計』】参照)を発行すべく議論がなされた。

【表 1-1: 検討会における議題と議論内容(第 1 回検討会)】

開催日時	● 2016年8月19日(金) 10:30~13:30
会場	● (独)環境再生保全機構 第3会議室 (ミューザ川崎8階)
出席者 (敬称略)	● 委員:島岡未来子 ● 環境省:松本和也(民間活動支援室) ● 地方EPO:久保田学・大崎美佳(EPO 北海道)、井上郡康・鈴木美紀子(EPO 東北)、島田幸子・高橋朝美・新井一永(関東 EPO)、新海洋子・高村美也子(EPO 中部)、上野浩文・田中拓弥(きんき環境館)、岩見暢浩(EPO ちゅうごく)、内田洋子(四国 EPO)、澤克彦・山内一平(EPO 九州) ● GEOC:平田裕之、尾山優子、江口健介
議題	目的:「運営制度の設計」についての知見蓄積

⁴ アドバイザー委員会委員:佐藤真久(委員長)、鬼沢良子、船木成記、田中泰義、島岡未来子

⁵ 検討会メンバー:佐藤真久(委員長)、島岡未来子、環境省総合環境政策局環境経済課民間活動支援室、GEOC/EPO、地方 EPO(順不同)

	1 今年度の予定と協働ハンドブック Vol.2 の共有 1.1 今年度の作業部会の予定 1.2 協働ハンドブックについて 2 「運営制度の設計」のノウハウの抽出 2.1 「運営制度の設計」についておさらい 2.2 協働事業を通じたノウハウ抽出と整理 2.3 論点の洗い出し
--	--

【表 1-2: 検討会における議題と議論内容(第 2 回検討会)】

開催日時	● 2016 年 10 月 13 日(木) 13:00~16:00
会場	● GEOC(地球環境パートナーシッププラザ)セミナースペース
出席者 (敬称略)	<ul style="list-style-type: none"> ● 委員:佐藤真久、島岡未来子 ● 環境省:松本和也(民間活動支援室) ● 地方 EPO:久保田学・大崎美佳(EPO 北海道)、島田幸子・高橋朝美・新井一永(関東 EPO)、新海洋子・内木京子(EPO 中部)、田中拓弥(きんき環境館)、岩見暢浩(EPO ちゅうごく)、常川真由美・内田洋子(四国 EPO)、澤克彦・山内一平(EPO 九州) ● GEOC:平田裕之、尾山優子、江口健介、山口史子
議題	目的:協働ハンドブック第 2 弾(運営制度の設計)の企画 1. 協働ハンドブック Vol.2 の企画について(構成案、16 事例の選択、考察ページの内容検討、運営制度の設計メンテナンス、中核的なチームを作る、タイトルや用語) 2. 平成 28 年度事業について(下半期スケジュール、協働ギャザリングの企画ブレスト、事務連絡)

【表 1-3: 検討会における議題と議論内容(第 3 回検討会)】

開催日時	● 2017 年 2 月 17 日(金) 10:00~12:00
会場	● GEOC(地球環境パートナーシッププラザ)セミナースペース
出席者 (敬称略)	<ul style="list-style-type: none"> ● 委員:佐藤真久 ● 環境省:松本和也(民間活動支援室)、村辻裕樹(中部地方環境事務所)、原真一郎(中国四国地方環境事務所 岡山事務所)、足立晃(中国四国地方環境事務所 高松事務所) ● 地方 EPO:久保田学・溝渕清彦・倉博子・大崎美佳(EPO 北海道)、井上郡康・鈴木美紀子・小山田陽奈(EPO 東北)、島田幸子・高橋朝美(関東 EPO)、新海洋子・高橋美穂・内木京子(EPO 中部)、田中拓弥・赤石大輔(きんき環境館)、岩見暢浩(EPO ちゅうごく)、内田洋子・亀山公美子(四国 EPO)、澤克彦・山内一平(EPO 九州) ● GEOC:平田裕之、尾山優子、江口健介、山口史子
議題	支援事務局の振り返り 1. 支援事務局の振り返り 2. 平成 29 年度事業について



《検討会協議風景(第一回)》
(2016 年 8 月 19 日)



《検討会協議風景(第三回)》
(2017 年 2 月 17 日)

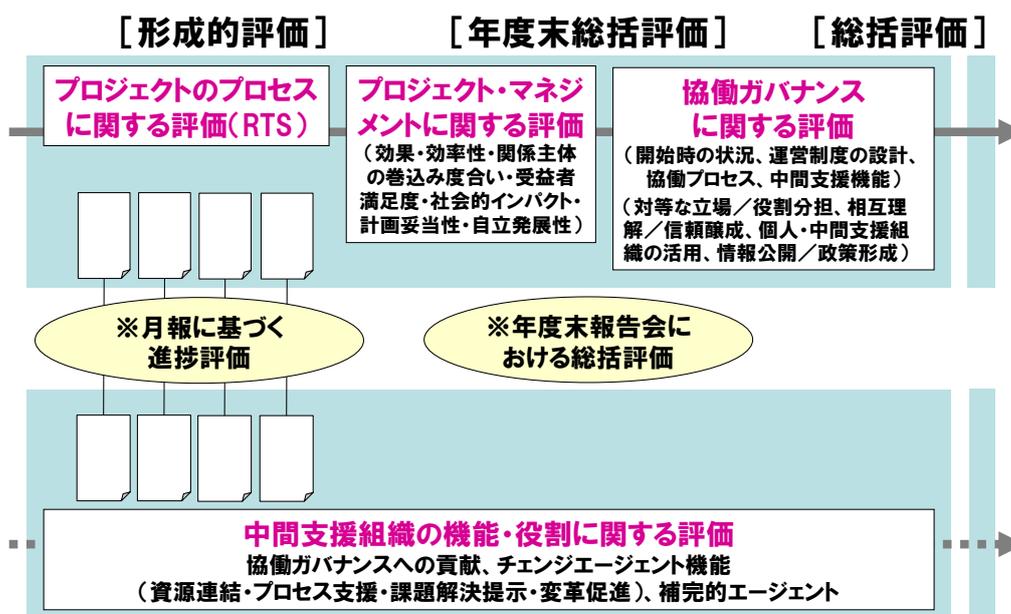
【写真 1-1: 検討会における議論風景】



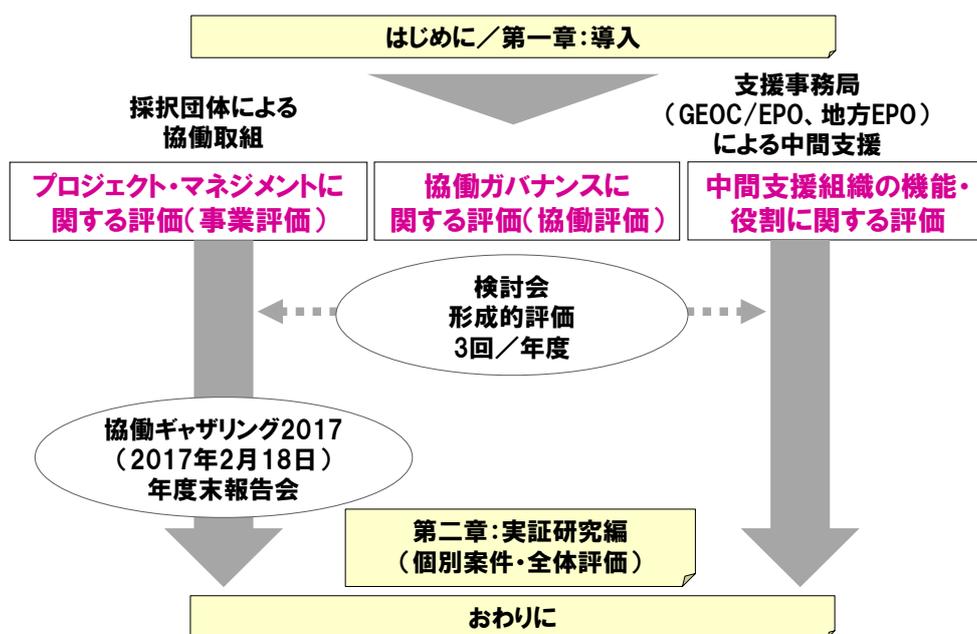
【図 1-1: 作成されたハンドブック『協働の設計～環境課題に立ち向かう場のデザイン』】
 (【付録 5: 協働ハンドブック『協働の設計』】参照)

4. 本報告書の章構成

本協働取組加速化事業の年度末報告として本報告書は、主として、(1)「プロジェクト・マネジメント」、「協働ガバナンス」の事例比較、「中間支援組織」の機能と役割に焦点を置いたものである(図 1-2)。採択団体による協働取組(プロジェクト)の評価のみならず、その協働取組を支援事務局として支える「中間支援組織」としての GEOC/EPO と地方 EPO の機能と役割の向上にむけて、理論研究、実践研究に基づいてまとめられている(図 1-3)。本協働取組加速化事業における評価活動は、(1)個人・組織・市民の能力の向上のためのマネジメント・ツールとして、(2)協働取組加速化事業の継続的改善のためのマネジメント・ツールとして、(3)評価活動の実施を通して知見・ノウハウの蓄積をし、関係組織と共有をするとともに、今後の活動に役立てること、を目的として実施されている。



【図 1-2: 本協働取組加速化事業における評価のプロセス】



【図 1-3: 本報告書の章構成】

第二章：実証研究編

—「プロジェクト・マネジメント」と「協働ガバナンス」の評価

1. はじめに

本章では、本協働取組加速化事業に採択された協働取組を、(1)事業評価としての[「プロジェクト・マネジメント」の評価]で指摘する7つの評価基準([効果一目標達成度]、[効率性]、[計画妥当性]、[関係主体の巻き込み度]、[関係主体の満足度]、[社会的インパクト]、[自立発展性])⁶と、(2)協働評価としての[「協働ガバナンス」の評価]で考察を試みる。「協働ギャザリング 2017」(年度末報告会)においては、採択されたすべての個別案件に対する「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価を行った(合同評価)。各協働取組の事業概要と実施スケジュールについては、【付録 2:平成 27 年度協働取組加速化事業(協働取組カレンダー・中期計画)】を参照されたい。年度末に開催された「協働ギャザリング 2017」(年度末報告会)の概要については、以下に記す。

2. 協働ギャザリング 2017(年度末報告会)の開催

本協働取組加速化事業の年度末報告会として、「協働ギャザリング 2017～環境×協働=どんな未来？」(以下、本年度末報告会)が、2017年2月18日(土曜日)に開催された(表 2-1、写真 2-1)。本年度末報告会には、採択団体ほか、地方環境パートナーシップオフィス(地方 EPO)、地球環境パートナーシッププラザ(GEOC/EPO)、環境省地方環境事務所(REO)、アドバイザー委員会委員、環境省を含めた計 123 名が参加をした。本年度末報告会は、[第一部:事例報告会]、[第二部:協働取組事業評価ワークショップ]で構成されており、[第一部:事例報告会]では、各協働取組の事例報告とその協働取組に対する地方 EPO による中間支援プロセスが報告された。[第二部:協働取組事業評価ワークショップ]では、本年度末報告会参加者により、「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価(個別案件)が実施された。本年度末報告会参加者は、「いいね」(プラス面での評価を意味)、「提案」(改善点・提案を意味)という 2 項目においてコメントを記載し、各協働取組を提示するパネルに添付する方式を採用した。本年度末報告会参加者により記載されたコメントについては、【表付録 3-1:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」(事業)／「協働ガバナンス」(協働)の有効性(プラス評価点)】、【表付録 3-2:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」／「協働ガバナンス」の提案・改善点】を参照されたい。

⁶ 「プロジェクト・マネジメント」評価の 7つの評価基準詳細については、[佐藤真久, 2014, 「平成 25 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業—プロジェクト・マネジメントの評価」と「中間支援組織の機能と役割」]に焦点を置いて、平成 25 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業、『最終報告書』を、参照

【表 2-1:協働ギャザリング 2017(年度末報告会)の概要】

- 開催日時:2017年2月18日(土)
- 参加者:採択団体ほか、地方環境パートナーシップオフィス(地方 EPO)、地球環境パートナーシッププラザ(GEOC/EPO)、環境省地方環境事務所(REO)、アドバイザー委員会委員、環境省を含めた計123名
- 協働取組事業評価ワークショップ:本年度末報告会参加者による事業と協働の合同評価
- 開催場所:ベルサール西新宿 Room4
- 当日スケジュール
 - 第一部:事例報告会
 - 第二部:協働取組事業評価ワークショップ



【写真 2-1:協働ギャザリング 2017(年度末報告会)における議論風景】

3. 「プロジェクト・マネジメント」の評価(個別案件)

本章では、協働ギャザリング 2017(年度末報告会)参加者による「プロジェクト・マネジメント」(事業)に関する評価コメントに基づいて、考察を述べることとする。詳細については、【表付録 3-1:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」(事業)／「協働ガバナンス」(協働)の有効性(プラス評価点)】を参照されたい。なお、今後の各協働取組の「プロジェクト・マネジメント」(事業)の効果的・効率的実施にむけた提案・改善の詳細については、【表付録 3-2:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」／「協働ガバナンス」の提案・改善点】を参照されたい。

3.1.協働取組の[効率性]の評価

採択団体の実施する協働取組の[効率性]については、「人的資源の投入」、「財源の投入」、「資源の活用」、「協働実施体制」、「制度の活用」、「文化的基盤の活用」、などに協働取組の特徴が見られる。本協働取組加速化事業は、自治体との連携・協働による「政策協働」のアプローチを採用しているため、表 2-2 で示すように、協働実施体制、制度の活用、資源の活用、財源の投入など、従来の一実施主体では難しいアプローチを可能にさせ、[効率性]を向上させているといえよう。地域課題、政策課題とリンクをした協働取組が、様々な資源、情報、機会、組織のつながりを可能にさせている点に、持続可能な地域づくりにむけて果たす、本協働取組の潜在性と可能性をうかがうことができる。本協働取組が果たす[効率性]の向上への貢献度合いについては、本協働取組加速化事業における協働取組の継続的な評価が必要とされている。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([効率性])については、表 2-2 を参照されたい。

3.2.協働取組の[効果－目標達成度]の評価

採択団体の実施する協働取組の[効果－目標達成度]については、本協働推進事業の目標である地域の「環境保全」だけでなく、「コミュニティ・プロデュース」、「人材育成」、「ビジネス展開」、「政策協働」、「組織活性化」などに協働取組の特徴が見られる。本協働取組加速化事業の目標は、地域社会における環境保全であるが、表 2-3 からわかるとおり、協働取組は、多様な目標に対しても並行して達成しうる潜在性と可能性を有しているといえる。とりわけ、コミュニティ・プロデュース、人材育成、ビジネス展開、組織活性化といった、社会的側面、経済的側面、組織的側面に対しても貢献できる点が、表 2-3 から読み取ることができる。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([効果－目標達成度])については、表 2-3 を参照されたい。

3.3.協働取組の[計画妥当性]の評価

採択団体の実施する協働取組の[計画妥当性]については、地域社会の多様なニーズに対応をした協働取組の[計画妥当性]を読み取ることができる。地域社会の多様なニーズについては、環境保全だけではなく、経済的、社会的ニーズにも対応している協働取組が多く見受けられる。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([計画妥当性])については、表 2-4 を参照されたい。

3.4.協働取組の[関係主体の巻き込み度]の評価

採択団体の実施する協働取組の[関係主体の巻き込み度]については、「世代間」、「自治体」、「議員」、「企業」、「ユース」、「シニア」、「女性」、「専門家」、「地縁組織」、「農漁業者」、「住民」、「就労訓練者」、「外国人」など多岐にわたる関係主体を巻き込んでいる点に協働取組の特徴が見られる。本協働取組加速化事業は、「政

策協働」のアプローチを採用しているため、自治体の巻き込み度が高い。

具体的には、[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組のように、学生が島民へ聞き取り、信頼関係、仲間意識、想いを表出化させるような、世代間のコミュニケーションを実施している事例(昨年度からの継続案件)のほか、[10]bioa(ビオア)の取組のように、茨木市行政間のつながりの強化、組織内のヨコの連携を構築している事例(昨年度からの継続案件)や[16](特活)筑後川流域連携倶楽部の取組のように、自治体に担当課がないところを、協働取組を通して、組織内の部課署の相互連携を強化している事例のように、行政の組織改革に活用されている取組が見られる。さらには、[16](特活)筑後川流域連携倶楽部の取組のように議員の協力を得て実施している事例や、企業との連携事例([8](株)柳沢林業、[9]ヨシネットワーク、[12](特活)うべ環境コミュニティー、[13]NPO 森からつづく道、[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議)、ユースの巻き込みと連携([1](一財)北海道国際交流センター、[10]bioa(ビオア)、[13]NPO 森からつづく道、[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議)、女性の積極的な参画を促している事例([1](一財)北海道国際交流センター、[5]駿河台大学)なども見られる。そのほか、就業訓練者が主役になるような取組の推進([3](一社)あきた地球環境会議)、外国人の積極的な巻き込み([1](一財)北海道国際交流センター)など、特徴ある取組も見られる。いずれにしても、[関係主体の巻き込み度]については、異質性ある多様な主体との協働を促進する本事業の特徴を十分に反映しているものと見受けられる。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([関係主体の巻き込み度])については、表 2-5 を参照されたい。

3.5.協働取組の[関係主体の満足度]の評価

採択団体の実施する協働取組の[関係主体の満足度]については、多様な主体に対して、満足度の向上が見られている点に協働取組の特徴が見られる。[関係主体の満足度]においては、満足度が高い点を強調している取組だけでなく、その結果がもたらす新たな展開、協働の更なる深化など、様々なものが見られる。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([関係主体の満足度])については、表 2-6 を参照されたい。

3.6.協働取組の[社会的インパクト]の評価

採択団体の実施する協働取組の[社会的インパクト]については、「知名度」、「制度準備」、「産業振興」、「横断的課題への影響」などに協働取組の特徴が見られる。本協働取組(継続案件除く)が、[社会的インパクト]をもたらすまでには十分ではない点が表 2-7 から読み取ることができるが、今後、[社会的インパクト]をもたらす素地の形成に貢献できていることは、評価すべき点であろう。

とりわけ、採択団体が中間支援機能を有してきていること([1](一財)北海道国際交流センター)、社団法人が設立されるといった組織化([5]駿河台大学)、行政政策への反映([15](特活)おきなわグリーンネットワーク、[13]NPO 森からつづく道)、町・社協・NPO 間の協定書の発行([3](一社)あきた地球環境会議)、自治会等の地縁組織の活性化([4]鶴岡市三瀬地区自治会)、などに社会的インパクトを見ることができる。さらには、横断的課題への影響(環境・文化・歴史)もでており、全取組において、環境、経済、社会、文化などの多様な側面を関連づけた持続可能な社会の構築にむけた基盤構築への貢献もみられている。

なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([社会的インパクト])については、表 2-7 を参照されたい。

3.7.協働取組の[自立発展性]の評価

採択団体の実施する協働取組の[自立発展性]については、「対外の技術サービス」、「人材・組織・制度」、

「財務」、「技術」、「共有のミッション・ブランド化」、「政策協働」、「協働体制」、「ビジネスモデルの構築」、「共働性」などに協働取組の特徴が見られる。本協働取組が、[自立発展性]をもたらすまでには十分ではない点が表 2-8 から読み取ることができるが、今後、[自立発展性]をもたらしえる素地の形成に貢献できていることは、評価すべき点であろう。

とりわけ、他地域でも参考になりうる協働取組のノウハウの蓄積([2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組に見られる人と猫と海鳥が共生する環境づくり、[3](一社)あきた地球環境会議における社会課題と林業活性化とのリンク、[5]駿河台大学における先進的エコツーリズムのモデル構築、[10]bioa(ビオア)における環境教育と地域活性化の相互リンクの強化、[11](有)日本シジミ研究所における島内特有の課題解決にむけた人材育成と環境教育、[12](特活)うべ環境コミュニティーにおける地域プロデュースと中間支援機能のノウハウの蓄積、[15](特活)おきなわグリーンネットワークの漁業と農業を関連づける総合的な社会づくりなどが見られる。また、協働主体間における役割分担の明確化がもたらす協働の深化([3](一社)あきた地球環境会議)、オーナー制度(里親)の制度化([14]阿南市 KITT 賞賛推進会議)などが見られる。さらに、ビジネスモデルの構築([2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会、[3](一社)あきた地球環境会議、[15](特活)おきなわグリーンネットワーク)も見られている。財務面では、[16](特活)筑後川流域連携倶楽部の取組に大きな特徴が見られており、竹資源の有効活用による環境保全と地域活性化において、企業や行政との連携、事業収益性の向上、資金獲得にむけた取組の見える化、などがなされている。また、[自立発展性]の背景には、共働性も見られている点([5]駿河台大学)が、本事業における成果の一つとして挙げられよう。このように、多様な視点から今後の[自立発展性]の向上に大きな素地を形成している点も評価すべき点である。なお、協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([自立発展性])については、表 2-8 を参照されたい。

【表 2-2: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価([効率性])】

	いいね(+評価点)
人的資源の投入(人件費の割合・目的・内訳)	<ul style="list-style-type: none"> ● 大学連携チームの参画→協働への貢献。[1] ● 外部の意見を入れてきたのは新しい視点が入っている。[1] ● 内外のつなぎ役がいることで、内目線と外目線がリンクする。[1] ● 他の地方からの人にもまず大沼を実際に見てもらったこと。[1] ● キーマンだけだと難しい人に参画してもらったための会議戦略がすごい。[1] ● 非常に多様な(地域も全国の)人の意見(風)を取り入れていること[1] ● 個々人の承認欲求を考えるとマッチングのポイント。[1] ● 大学を活用し地域住民と交流。[2] ● 学生が島民へ聞き取り、信頼関係、仲間意識、想いをはき出す。[2] ● 意識調査を学生さんに行ってもらったのはとてもよい。[2] ● 台風になる人材がいることで地域が動くと感じた。[5] ● キーパーソンを核に据える求心力いいね。[5] ● 地域のことを先生が親身になっている。[5] ● 今あるステークホルダーを活用した。[5] ● 女子力を最大限活用。[5] ● 女性リーダーの力が中心力になっているのでしょう。[5] ● 地域おこし協力隊として、模範的なケース。[6] ● 協力隊ならではのミッションだと思います。[6] ● 外の人が住民を引っ張り出してよいと思う。[6] ● シニアがやっているのはすごいし、知を実際に集約して活用しているのがいい。[7] ● 誇りを持ったシニアパワーを最大限活かしている。[7] ● シニアのニーズをつかんだことが良かった。[7] ● シニアの人たちの考え方、生き方を変えていく取組はすごいことだと感じた。[7] ● 竹を資源にするシニアパワー[7] ● 実行者の意識が変わった。[8] ● 高齢の方もプレーンストーミングに参加している。[8]

	<ul style="list-style-type: none"> ● シニアの人々の多数参加が良い。[8] ● 学生団体が参加しているところ。[10] ● 多様なステークホルダーとのつながりを作ったことはすばらしい。手法が気になる。[10] ● 外部の団体の介入。[11] ● 町内会長が「保全の会」の会長を兼ねていること。[14] ● 中学校の参画が新鮮でした。住民にも寄り添っているようでよい雰囲気。[14] ● 地元の宝を守るのに企業の協力を得るといふ発想がいい。[14] ● 修学旅行など多くの人が知る機会づくり。[15] ● 多面的な協働でつながっている。(農＝漁＝行政＝環境学習＝観光のつながり)[15] ● 林業の会社を中心となってコーディネートされている。[16]
財源の投入	<ul style="list-style-type: none"> ● 村からの投資を県に広げた。[15]
資源の活用	<ul style="list-style-type: none"> ● 都市郊外の問題を立地の有利性を活かして、協働を意識しながら解決しようと試みている。[5] ● 地域資源＝マネー。他のステークホルダーがない。気づき、改めて知る。[6] ● 環境教育に地域の資源を入れたところ。[9] ● 多様なリソース(場、組織)の活用。[12] ● 地域資源としての工場の活用(企業の巻き込み)。[12] ● 資源が山盛りでうらやましい。[13]
協働実施体制	<ul style="list-style-type: none"> ● ちゃぶ台返しを防ぐための会議対策はとても有用だと思う。分科会や女子会など。[1] ● 課題をしっかりと話し合い、違う世代の意見を取り入れた。[1] ● 森林保全と就労支援の両立、ステークホルダーの拡大。[3] ● 福祉との連携、過疎との共存。[3] ● 社協との協力、福祉と環境の合作。[3] ● 課題の明確化がなされており、それに対応した取組を適切に取っていたように感じられた。[4] ● 的がしぼれていてうまく行っている。[5] ● プラットフォームを作る体制づくりとエコツアー、環境学習をつなげていったこと。[9] ● 新しいプログラムがみんなの力と知恵と思いで作られている。[9]
制度の活用	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治体の計画と連動している。[5] ● 市のいくつかのセクターとつながった。[10] ● 行政の関連した部署と関わっている。今後に繋がれば。[10] ● 教育委員会の参加(各小学校、学童保育)。[12] ● 自治体の世代を超えた農業指導員とのつながりをコーディネート。[15] ● コアメンバーに自治体関係者を入れ活動を拡大。[15]
文化的基盤の活用	<ul style="list-style-type: none"> ● エコツアーで食と文化の発信をしている。[13]

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ピオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-3: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価
 (〔効果－目標達成度〕)】

	いいね(+評価点)
環境保全	<ul style="list-style-type: none"> ● 難しい水質問題に対して、アカデミックの意見を取り入れると課題と解決が見えてくる。[1] ● 海鳥もノラネコもドブネズミもみんながよくなるつながりの取り組みがいい。[2] ● 電気ではなく熱でやろうとしているところ。[4] ● バイオマス燃料の利用、目の付け所がいい。[4] ● 木質バイオマスの価値の可視化→1.1 億円価値のインパクト大。[4] ● 1.1 億円分のエネルギーをバイオマスにおきかえる、という目標がわかりやすい。[4] ● 温暖化で“よしず”の良さは必ず見直されると思います。[9] ● 地域の魅力発信と生物多様性の劣化の解決のマッチングがよい。[13] ● 環境と観光、環境と農業とつなげて対策を実施している。[15]
コミュニティ・プロデュース	<ul style="list-style-type: none"> ● 人間関係にメス！を入れる。[1] ● ツール(天売猫だより)づくりと話し合える場(連絡会)でネコに対する意識を変化させた。[2] ● 島民の意思を反映、抽出する場づくり+情報発信(天売猫だより)[2] ● 「猫だより」というツールはわかりやすそう。「みんなが手に取ってもらえる」工夫。[2] ● 「猫だより」は離島ならではの工夫で見習いたい。[2] ● 情報共有できるツール「天売猫だより」で思いが一つになった。[2] ● ネコだけじゃなくほかのところと交流をすることが大切。結果ネコのとりくみにつながるというストーリー立て。[2]

	<ul style="list-style-type: none"> ● 多様な主体の様々な関心を活かした上で、天売島のアピールに効果的につなげていた。[2] ● 福祉との連携、過疎との共存。[3] ● 社協との協力、福祉と環境の合作。[3] ● 森林活用・環境教育・社会福祉のマルチベネフィットで協働を仕掛けた着眼点が素晴らしい。[3] ● 森林保全と就労支援の両立、ステークホルダーの拡大。[3] ● 福祉と森林でイノベーションをおこすアイデア(課題どうしのかけあわせ)。[3] ● 夢物語ではなくしっかり調査をされている。[4] ● 経済試算とデータは強い。[4] ● 具体的な数値がでること取組につながる。[4] ● 試算にきっちり向き合っている。[4] ● 地域資源を知る。[4] ● 狭い中での地域の理解がうまくいっている。[4] ● 「-」+「-」から「+」を産もうというアイデア。[4] ● 課題の明確化がなされており、それに対応した取組を適切に取っていたように感じられた。[4] ● あらゆる手段を導入しているアイデア量が多い。[5] ● 大学による課題の捉えなおし、“持続可能性”への次元に向上させた。[5] ● 目的の共有→課題解決の加速化。[5] ● 地道な説明。あせらない活動。[6] ● 竹の価値を生み出すための工夫。[7] ● 竹のポテンシャル大きいということがわかった。[7] ● 竹を資源にするシニアパワー[7] ● まず活動を通じて繋がりを作り、そこから意見を募る手法。[8] ● 「福祉」に結びつけるところにニッチな視点。[8] ● 様々な視点でヨシを活用しているところ。[9] ● 「地域」をベースに環境教育を進めておられるのが良い！[10] ● 誰も知らないところから、よくつなげている。「島」大変、エライ！[11] ● 宇部方式による推進が良い。[12] ● 行政、企業、その他団体が具体的に取り組むことができている。[12] ● 農業を身近に感じる。[13] ● 島外からの協力者を増やす、“外から支える”仕組み。[14] ● 持続可能な地域コミュニティの視点が良い。[15] ● 横断的に具体的な市や村をステークホルダーに巻き込んでいる。[15] ● 竹林の積極的な活用。[16]
人材育成	<ul style="list-style-type: none"> ● 竹を資源にするシニアパワー[7]
ビジネス展開	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域内経済循環を目指した歩み、すごい。[4] ● 島外の企業の立場でのマルチベネフィットの追求(貢献)は魅力的！[11] ● 事業の収益性を確保することで事業の経済性と対話を高めることを目指している。[16]
政策協働	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会ならではの連携の良さを感じた。1.1億円の試算を出し、目標を設定したのがいい。[4] ● 分野横断的かつ行政の協力が得られているところが良い。[4] ● 自治体の計画と連動している。[5] ● 松山市の保全計画との政策協働。[13]
組織活性化	<ul style="list-style-type: none"> ● 様々な会議の体系がよい。相手に応じた対応をしている。[2] ● 課題を分析しっぱなしでなく、それを分りやすく様々な関係者に説明し、主体的な参加者、理解者を増やしている構図がとても明快。[2]

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ビオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティ/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-4: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価(計画妥当性)】

	いいね(+評価点)
年度実施計画時との比較(内部条件・外部条件・資源投入・組織構成や機能・事業展開)	<ul style="list-style-type: none"> ● 人間関係にメス！を入れる。[1] ● いろいろな作戦を立てたところは良いと思います。1つでは、つまる可能性が大きい。[1] ● 人間模様を改善させるシナリオ。[1] ● 場をつくる、言葉をつくる、良い。[1] ● 課題が推移していることに対応して、鳥→猫→ネズミ→島民のつながりを作っている。[2] ● 取組によって生じた新たな課題についてもきちんと向き合おうとする姿勢が良い。[2] ● ノラネコ獲ったらドブネズミが増えた、が出发点となり、問題把握の発想がすばらしい。[2] ● ネズミが増える等、次の不具合への対策がよいと思う。[2] ● 島民密着型の取組方法。[2]

- 自治体を動かしてコアメンバーになってもらったのがすごい。[3]
- 具体的事業(木ハガキ)を参加のきっかけに、モチベーションにして協働、主体的参画につながっていったこと。[3]
- 課題の明確化がなされており、それに対応した取組を適切に取っていたように感じられた。[4]
- 的がしぼれていてうまく行っている。[5]
- 自治体の計画と連動している。[5]
- 超高齢地区で住民を動かした仕掛け。[6]
- 問題意識がおもしろい。[7]
- 竹の価値を生み出すための工夫。[7]
- 誇りを持ったシニアパワーを最大限活かしている。[7]
- シニアのニーズをつかんだことが良かった。[7]
- 活動の幅が広がったことで、地域住民を巻き込もうとして変わっていることの気づき。[8]
- 「福祉」に結びつけるところにニッチな視点。[8]
- 林業企業と山林所有者の関係が活かされている。[8]
- 着地型観光への発展。[9]
- 環境だけでなく観光とかの掛け算は良い。[9]
- 未来のために今何をすべきかについて明確にわかるようになっている。[10]
- 課題を明確にして、計画に反映していること。[10]
- 課題を明確にして始めた。[10]
- 教育委員会の参加が良い→小学校の協力が得られた。[10]
- 藻場づくりと担い手づくりを一緒にやっているといいところがある。[11]
- 課題が明確でよい。協働における「人間関係構築の壁」。[11]
- 協働の課題をよく認識している点。[11]
- どんな課題があるのか、理解している。[11]
- 協働の課題が整理されているので、解決に必要なステークホルダーがわかりやすい。[11]
- 宇部方式による推進が良い。[12]
- 多様なリソース(場、組織)の活用。[12]
- テーマとして生物多様性に注目していること。[13]
- 予算もつきにくい生物多様性という視点を中心にすえて、事業を行っている。[13]
- 生物多様性を他の視点からつなげる手法。[13]
- 生物多様性以外のメリットを意識して活動している。[13]
- 地域の魅力発信と生物多様性の劣化の解決のマッチングが良い。[13]
- 目標が明確でぶれない活動を保障している。[13]
- 旧村って早々になくならないですよ。地域・広域地域っていう捉え方が視点として良いなど思いました。[13]
- 地元に着目している。[13]
- ツアー全体のコンセプトはいい。[13]
- 問題意識・設定がユニーク。[14]
- 現状分析&『ササユリ』を中心にしたアイデア、素晴らしい着想。[14]
- 昔語りの縁が大事だと思います。[14]
- 島内と島外の関係性をつなぐササユリと信頼関係。[14]
- 環境と観光、環境と農業とつなげて対策を実施している。[15]
- 持続可能な地域コミュニティーの視点が良い。[15]
- 赤土対策はきっかけという観点で、赤土対策→持続可能なコミュニティーにつなげている。[15]
- 多面的な協働でつながっている。(農＝漁＝行政＝環境学習＝観光のつながり)[15]
- ビジョンが明確。[15]
- テーマ設定が具体的で切実で、活動の解決効果も見やすく納得感がある。[15]
- 多くの課題→整理→ネットワークづくりの流れがいい。[16]
- 行政の横断的な関わり。[16]
- 協働により竹問題へ取り組むことで、対策が進み始めた。[16]

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ピオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-5:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価
 ([関係主体の巻き込み度])】

	いいね(+評価点)
世代間	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生が島民へ聞き取り、信頼関係、仲間意識、想いをはき出す。[2]
自治体	<ul style="list-style-type: none"> ● 茨木市行政間のつながり、縦割り行政、ヨコの仕組みづくり。[10] ● 市のいくつかのセクターとつながった。[10] ● 行政の関連した部署と関わっている。今後繋げれば。[10] ● 教育委員会の参加(各小学校、学童保育)。[12] ● 市の計画とのリンクは行政にとっても協働を行いやすい。[13] ● 松山市の保全計画との政策協働。[13] ● 行政間のネットワーク化。[15] ● 自治体の世代を超えた農業指導員をつなぐをコーディネート。[15] ● 自治体に担当課がないところを、つなぐことで変えていった。[16] ● 行政の横断的な関わり。[16] ● 現場の方と自治体に横串を指している。[16] ● 横断的に具体的な市や村をステークホルダーに巻き込んでいる。[15]
議員	<ul style="list-style-type: none"> ● 議員(住民)の協力。[16]
企業	<ul style="list-style-type: none"> ● 地元の林業会社が立ち上がったところ。[8] ● 色々な企業のまきこみ。[9] ● 企業サイトの活用、企業の環境教育への参加は重要。[12] ● 地域資源としての工場の活用(企業の巻き込み)。[12] ● 事業者が多数参画している。[13] ● 地元の宝を守るのに企業の協力を得るという発想がいい。[14]
ユース	<ul style="list-style-type: none"> ● 若い力と女子の力、外人パワーなど、アオコ問題に異種若者を投入した活力はすばらしい。[1] ● 学生団体を巻き込んで新しい発想や行動力を得た。[10] ● 学生団体が参加しているところ。[10] ● 小学校が加わると楽しみも増える。[13] ● 中学校の参画が新鮮でした。住民にも寄り添っているようでよい雰囲気。[14]
シニア	<ul style="list-style-type: none"> ● 淋しいシニア部落に「地域の人々の参加」を創るその挑戦力はすごい。地域住民との信頼関係構築に分けて、意見交換の場をつくり、情報収集をしてそれぞれが課題を認識して、自分たちで改善していくようにしていること。[6] ● シニアのニーズをつかんだことが良かった。[7] ● 高齢の方もブレインストーミングに参加している。[8]
女性	<ul style="list-style-type: none"> ● ラムサール女子会などの女性を入れることにより会議の進め方が変わってくる。[1] ● ユースと女子会がいい。[1] ● 漁協＝背広を着たオジサンイメージ。女子を入れるのはいいですね。[1] ● 若い力と女子の力、外人パワーなど、アオコ問題に異種若者を投入した活力はすばらしい。[1] ● 女子力を最大限活用。[5]
専門家	<ul style="list-style-type: none"> ● アカデミック+地域へのアプローチ。[1] ● 200件のアンケート調査を通じたニーズ分析がいい。[1] ● 外部と内部のつながりにアオコ問題をとりあげたところ。[1] ● 外部の人に現場をきちんと見て意見をもらえるようにしたこと。[1]
地縁組織	<ul style="list-style-type: none"> ● 自治会の方が中心となって多様なステークホルダーを巻き込んでいること。[4] ● 町内会単位でこれだけたくさんのステークホルダーを巻き込んでいるのはすごい。[4] ● 町内会長が「保全の会」の会長を兼ねていること。[14]
農漁業者	<ul style="list-style-type: none"> ● 農家と漁業者、対立から協働作業へ変えたこと。[15] ● 農と漁の協働作業、他地域への拡大の実現。[15] ● 環境・農業・漁業が協働。[15]
住民	<ul style="list-style-type: none"> ● 課題をしっかりと話し合い、違う世代の意見を取り入れた。[1] ● 一年目の成果、課題を受けて、「住民・島民」対象の活動(連絡会)に力を入れたことはよい。[2] ● 島の人の声を聞き、感情を理解したうえでネコ問題とドブネズミ対策の両立を図っていた。[2]
就業訓練者	<ul style="list-style-type: none"> ● 社会復帰×森林保全に対して就労訓練者が主役に。[3]
外国人	<ul style="list-style-type: none"> ● 若い力と女子の力、外人パワーなど、アオコ問題に異種若者を投入した活力はすばらしい。[1]
全体	<ul style="list-style-type: none"> ● スムーズかつ参加度の高い会議進行のための作戦がいくつもあることがよい。[1] ● これまで関わっていた主体を尊重しながら、会議を分けるなどして効率的に実施した点[1] ● マルチステークホルダーの取り組み、元気がいい印象。[1] ● 多様な人々に参加してもらってプラットフォームづくりができている。[1] ● 料理や体験などの一般向けアプローチ。[1] ● 取組によって生じた新たな課題についてもきちんと向き合おうとする姿勢が良い。[2] ● 「猫だより」というツールはわかりやすそう。「みんなが手に取ってもらえる」工夫。[2]

- 「猫だより」は離島ならではの工夫で見習いたい。[2]
- 情報共有できるツール「天売猫だより」で思いが一つになった。[2]
- 島民への広報誌発行。ネコを好きな人とキラライな人をつなぐアイデア。[2]
- 「天売猫だより」対立構造にならないためのツール。[2]
- 天売猫だより。情報伝達以上の役割を最初から目的にしていた。問題提起と共通認識作り。[2]
- 島民の気持ちを優先したプロジェクト。ネコ問題をきっかけに対話(交流)する機会やネットワークが生まれた。[2]
- 地元の意見に丁寧に答えている謙虚な姿勢は、この取り組みを持続的に続けるうえでよいと思う。[2]
- 課題を分析しっぱなしでなくそれを分りやすく様々な関係者に説明し、主体的な参加者、理解者を増やしている構図がとても明快。[2]
- 地域との合意形成により、持続的な活動へつながる。[2]
- 調査アプローチに基づく島民の理解促進。[2]
- 生物の数の調整について新たな意見を把握するのがよい。[2]
- まず現場を見る。地域の人との交流会。[2]
- 猫ツアーを通じた環境教育。課題を解決に向けた教材にしているのが良い。[2]
- 子どもたちへのアプローチ手段としての、天売猫カードゲーム作成。[2]
- ステークホルダーの整理、巻き込み、仲間づくり。[3]
- ステークホルダーが広がり、地道な取り組みがあった。[3]
- 多様な人の巻き込み方がユニーク。[3]
- 会議への参加、関わり。積極性が“伝染”。[3]
- 具体的事業(木ハガキ)を参加のきっかけに、モチベーションにして協働、主体的参画につながっていったこと。[3]
- ステークホルダーが集まった会議で、主体的発言をするように進んだことがいい。[3]
- 「異業種交流」という着眼点(整理の仕方)がおもしろい。[3]
- アプローチ方法を異業種交流と位置付けたことでパートナーの考え方が広がった。[3]
- ステークホルダーがちょっとずつ増えている。[4]
- ステークホルダーの巻き込み、数・分野ともに増えている。[4]
- 非常に多様なステークホルダーが最初から協力的で地域の理解もあつてうらやましい。[4]
- 狭い中での地域の理解がうまくいっている。[4]
- ゆるやかなつながりに共感します。[4]
- ステークホルダーの皆の協力体制がすばらしい。[4]
- 分野横断的かつ行政の協力が得られているところが良い。[4]
- 新しい視点があり感じられないが、やりたい気持ちが大きくある。[5]
- 楽しいことをしようということが次々と広がった。[5]
- 「楽しくやる」ことは大切。[5]
- 多くの関係者をまきこんでいるところはよい。[5]
- 自分たちの活動から地域の人たちの巻き込みへの拡大プロセス。[5]
- 少子高齢化の中心的な課題に対して、地域の人たちに機会を作り、参加するようにして、解決していること。[5]
- 「地域の人が主体で考える」ための場づくりは大切な要素。[6]
- 地域の人とつながるための行動力。[6]
- 当事者意識がわいてくるような対話のプロセスデザイン。[6]
- 地域の人との信頼関係づくりの苦労に共感。[6]
- 地域に入るための地道な取組いい。[6]
- 地区の運動会に参加。[6]
- 協力隊の活動報告会など、地域にとけこもうとしているところ。[6]
- 主体性をひきだす過程にいいね！[6]
- ステークホルダーの変化。流れがよいと感じた。[6]
- “呼ばれたから来る”ステークホルダーの主体性に着目した。[6]
- 地域の人とのつなぎ役として円滑にしている。[6]
- 地道な説明。あせらない活動。[6]
- 地道な信頼関係づくり。[6]
- 冷たい反応にもめげずに粘り強くワークショップを重ねた点。[6]
- 住民との共同作業で手伝う(住民に寄って)という切り口がよい。[6]
- 「インセンティブが大切」に共感。[7]
- 動員力(ネットワークか?)。[7]
- 高齢者のための看護部門を取り入れている。[8]
- 村の人たちを巻き込んだ取組がよい。[8]
- まず活動を通じて繋がりを作り、そこから意見を募る手法。[8]
- 幅広い関係者に働きかけ、共有段階を丁寧に進めている点。[8]
- ターゲットを広げていった。[8]

	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域愛をベースに、明確なビジョンをもとに事業を進めていること。[9] ● ステークホルダーが広がるプラットフォームになっている。[9] ● 新しいプログラムがみんなの力と知恵と思いで作られている。[9] ● ダム、高速など環境教育とは一見結び付きにくい場での取り組みは興味深い。[10] ● いろいろなどところとつながりを広げている。[10] ● 都市計画とあいまって多くのステークホルダーが関わって進められている。[10] ● 多様なステークホルダーとのつながりを作ったことはすばらしい。手法が気になる。[10] ● 島内からの提案を受けとってリードしている。[11] ● 島外からの提案が島民の気づきになったこと。[11] ● 既に活動している組織との連携。[11] ● ステークホルダーを有機的につなげようとしているところ。[11] ● 協働の課題が整理されているので、解決に必要なステークホルダーがわかりやすい。[11] ● 行政、企業、その他団体が具体的に取り組むことができている。[12] ● 産官学民とした向上の対策が難しいながらも取り組んでいるところ。[12] ● 体制づくり。多くの団体をまとめた。[12] ● 多様なリソース(場、組織)の活用。[12] ● 各セクターに問題意識を共有しようとしているのがいい。[13] ● 風早生きもん DAYS には多くのステークホルダーが参画している点が良い。[13] ● 外の人の視点が地域の良いところを地元の人に気づかせる。[13] ● 関係者のつながり、キーワードとしての『ササユリ』の使い方。[14] ● 伊島というアクセス環境が悪い地域、島という閉鎖的な環境において、島の方々としっかりとした関係性が築けていて素晴らしい。[14] ● 昔のササユリの様子を見せて、埋もれていた関係性を掘り起こした。[14] ● ヨソ者の理想だけを押し付けてないところがいい。[14] ● 広い関係者に声掛けし、共有連携をていねいに行っている。[16] ● いろいろな分野の関係者によるコミュニケーションの場をつくった。[16] ● モデル形成のためのパートナーシップづくり。[16]
--	--

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ピオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-6:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価
〔関係主体の満足度〕】

	いいね(+評価点)
全体	<ul style="list-style-type: none"> ● 科学を取り入れながら楽しい活動をしている。[1] ● 楽しく多くの人たちを集めている。[1] ● 個人々の承認欲求を考えるとマッチングのポイント。[1] ● スムーズかつ参加度の高い会議進行のための作戦がいくつもあることがよい。[1] ● 市民団体と行政の会議は、まとまらない点に着目したのが良い。[1] ● マルチステークホルダーの取り組み、元気がいい印象。[1] ● 多様な人々に参加してもらおうプラットフォームづくりができている。[1] ● 単純にネコ問題であるが、不妊去勢でなく島の問題として取り組んだこと。[2] ● 一年目の成果、課題を受けて、「住民・島民」対象の活動(連絡会)に力を入れたことはよい。[2] ● 島の人の声を聞き、感情を理解したうえでネコ問題とドブネズミ対策の両立を図っていた。[2] ● 島民の気持ちを優先したプロジェクト。ネコ問題をきっかけに対話(交流)する機会やネットワークが生まれた。[2] ● 地元の意見に丁寧に答えている謙虚な姿勢は、この取り組みを持続的に続けるうえでよいと思う。[2] ● 島の人との交流を通してそれぞれの立場で、問題の解決に向けて明確にしていると思われた。[2] ● 島民への広報誌発行。ネコを好きな人とキラキラな人をつなぐアイデア。[2] ● 「天売猫だより」対立構造にならないためのツール。[2] ● 天売猫だより。情報伝達以上の役割を最初から目的にしていた。問題提起と共通認識作り。[2] ● 調査アプローチに基づく島民の理解促進。[2] ● 生物の数の調整について新たな意見を把握するのがよい。[2] ● まず現場を見る。地域の人との交流会。[2] ● ツアー、島の人に取り組みを知ってもらうアイデア。[2] ● 「異業種交流」という着眼点(整理の仕方)がおもしろい。[3] ● 同床異夢でも連携。[3] ● 会議への参加、関わり。積極性が“伝染”。[3]

- ものづくりを通じたコミュニケーションの活発化、主体となる人々のやる気効果。[3]
- アプローチ方法を異業種交流と位置付けたことでパートナーの考え方が広がった。[3]
- 皆さんが一同に協力的な点はすごい財産。[4]
- 出発点から問題意識、危機感の共有があった。[4]
- 都度自己課題を確認(=評価)して新ステークホルダーに関わってもらっていることはすごい。[4]
- ステークホルダーミーティングで課題認識ができたこと。[5]
- 楽しいことをしようということが次々と広がった。[5]
- 「楽しくやる」ことは大切。[5]
- 当事者意識がわいてくるような対話のプロセスデザイン。[6]
- 地域の人との信頼関係づくりの苦勞に共感。[6]
- 地域に入るための地道な取組いい。[6]
- 地区の運動会に参加。[6]
- 協力隊の活動報告会など、地域にとけこもうとしているところ。[6]
- 主体性をひきだす過程にいいね！[6]
- 地域の人とのつなぎ役として円滑にしている。[6]
- 地道な説明。あせらない活動。[6]
- 淋しいシニア部落に「地域の人々の参加」を創るその挑戦力はすごい。地域住民との信頼関係構築に分けて、意見交換の場をつくり、情報収集をしてそれぞれが課題を認識して、自分たちで改善していくようにしていること。[6]
- 冷たい反応にもめげずに粘り強くワークショップを重ねた点。[6]
- 住民との共同作業で手伝う(住民に寄って)という切り口がよい。[6]
- シニアの人たちの考え方、生き方を変えていく取組はすごいことだと感じた。[7]
- 自分事になった。[7]
- 自己変革したいシニアの気持ちよく他のシニアにも勇気を与えようと思う。[7]
- 幅広い関係者に働きかけ、共有段階を丁寧に進めている点。[8]
- 会議の場が丸くなった。[8]
- あきらめない心が地域を動かした。[8]
- あきらめていた村の人たちのやる気を出していったところ。[8]
- プレストやワークショップに対する抵抗をあきらめない。[8]
- 新しいプログラムがみんなの力と知恵と思いで作られている。[9]
- 繋がりが増加を実感できている。[10]
- 学生団体を巻き込んで新しい発想や行動力を得た。[10]
- 地域の人にうまく火をつけたのは素晴らしい。[11]
- 「やりたいこと」をやりつつ仕組化を目指すチャレンジ。[12]
- 関係者の協働への理解を進めるトライ。[12]
- 外の組織を受け入れてもらうための内との関係構築。[13]
- 地元愛のある方に加わってもらっている。[13]
- 個々の活動をつなぎ、広げていった手法はいい。[13]
- 住民が自分たちで地域の良さを発信している。[13]
- 島内と島外の関係性をつなぐササユリと信頼関係。[14]
- 住民共通の大切なものをきっかけとして、連携しているところがよい。[14]
- 学校・地域に外からどう関わるか、信頼関係づくりをとでも大事にされている印象を受けました。[14]
- オーナー制度(里親)を作った点。[14]
- 昔のササユリの様子を見せて、埋もれていた関係性を掘り起こしたこと。[14]
- ヨソ者の理想だけを押し付けてないところがいい。[14]
- 中学校の参画が新鮮でした。住民にも寄り添っているようでよい雰囲気。[14]
- 島の「嫁」信頼関係の構築がスゴイ。[14]
- 活動が環境保全から地域のコミュニティーに大きなビジョンをもっているのがよい。[15]
- 竹林オーナー制度。[16]
- 大学との竹林研究連携。[16]
- 新たに参加したメンバーの逆提案が興味深い。他の団体も公表しあうといい。[16]
- 逆提案を引き出していったこと。[16]

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ビオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-7:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価
（〔社会的インパクト〕）】

	いいね(+評価点)
知名度 (プロジェクト・ 組織の知名度や評判、普及技術の知名度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 中間支援団体がハブとして機能できている(本気だが実ははむずかしい)。[1] ● 場をつくる、言葉をつくる、良い。[1] ● 就労訓練者が活躍する場、機会。[3] ● 就労訓練からアプローチしている点がいい。[3] ● 社会復帰×森林保全に対して就労訓練者が主役に。[3] ● 持続的な地域を描けている。[4] ● 大きなビジョンがある。[4] ● 社団法人の誕生が素晴らしい。うまく巻き込んで進められたように感じられました。[5] ● 法人格をもった団体をつくることで目的が統一されたように思う。[5] ● エコツーリズムの一步先に行くモデル。[5] ● 資源の価値がわかっている…。魚沼ブランド。見せ方上手。[6] ● 先導的プレーヤーから、中間システム機能を有していく歴史的転換→「協議会設立」というゴール。[12] ● パートナーの組織化→継続性の向上。[12] ● ササユリというシンボルによる結集(求心力)。[14] ● 大学との竹林研究連携。[16] ● モデル形成のためのパートナーシップづくり。[16] ● ノウハウを探ってアピールすることを目指している。[16]
本プロジェクト の影響による 制度準備	<ul style="list-style-type: none"> ● 七飯町の政策に反映されようとしている。[1] ● 協定締結は大きい成果。[3] ● 木の協定書、ストーリーがあつてとても魅力的。[3] ● 協定を木はがき素材でというのはとても良い。[3] ● 協定書の締結による関係性の変容。[3] ● 町・社協・NPOの「協定」は事業の継続のためになるので素晴らしい。[3] ● 協定として正式にシステムを作ったことで、今後も属人的にならずとも、取組を続けられるのは良いのではないか。[3] ● 自治体を動かしてコアメンバーになってもらったのがすごい。[3] ● 自治レベルでこの連携をつくったのはすごい。[4] ● 自治会の方が中心となって多様なステークホルダーを巻き込んでいること。[4] ● 自治会かっこいい！(しかも若い)。[4] ● 「自治会」として動いておられるのがすばらしい！自治のあるべき姿と思います。[4] ● バイオマス燃料の利用、目の付け所がいい。[4] ● 木質バイオマスの価値の可視化→1.1億円価値のインパクト大。[4] ● 1.1億円分のエネルギーをバイオマスにおきかえる、という目標がわかりやすい[4] ● 「-」+「-」から「+」を産もうというアイデア。[4] ● 分野横断的かつ行政の協力が得られているところが良い。[4] ● 行政計画との整合性いい。[5] ● 協働事業方針が市の施策に沿って連動している。[5] ● プラットフォーム化したもの(しくみ)を県が活用しているのはいいね！[9] ● 市の方針に合わせた取組。[10] ● 都市計画とあいまって多くのステークホルダーが関わって進められている。[10] ● 市の計画とのリンクは行政にとっても協働を行いやすい。[13] ● 松山市の保全計画との政策協働。[13]
産業振興 (労働人口・ 創業数・産業 振興例・ 産業適用例)	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域内経済循環を目指した歩み、すごい。[4] ● ヨシを活用したエコツアーは良いと思う。[9] ● 島内完結モデルの先進モデルへ。意味づけ、環境・社会・経済・教育の連携。[11] ● 行政と産業のすき間としての「竹」を投資力でつないだこと。[16] ● 事業の収益性を確保することで事業の経済性と対話を高めることを目指している。[16]
横断的課題 への影響(環 境・文化・歴 史)	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の観光資源を活かして、観光と保全の両立を目指すのは新しさもあり良い。[1] ● 大沼のいい所だけではなく課題点もしっかり見てもらおうようにしている。[1] ● 地域が直に海外とつながるのがいい。[1] ● 地域資産として歴史と自然文化との関連づけ。[1] ● 歴史とかまで踏み込んで幅広く深く取りんだこと。[1] ● 料理や体験などの一般向けアプローチ。[1] ● ツール(天売猫だより)づくりと話し合える場(連絡会)でネコに対する意識を変化させた。[2] ● 島民の意思を反映、抽出する場づくり+情報発信(天売猫だより)。[2] ● 「人と海鳥と猫が共生する天売島」ビジョンの構築。[2] ● ネコをハブとした交流を上手にやっている。必ずしも猫を中心としないイベントを行い、いつの間にかネコ

	<p>問題が進んでいる。[2]</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ツアー、島の人に取り組みを知ってもらうアイデア。[2] ● ネコだけじゃなくほかのところと交流をすることが大切。結果ネコのとりくみにつながるというストーリー立て。[2] ● 地域の課題から地域振興につながっている。[2] ● 多様な主体の様々な関心を活かした上で、天売島のアピールに効果的につなげていた。[2] ● 福祉との連携、過疎との共存。[3] ● 社協との協力、福祉と環境の合作。[3] ● 森林活用・環境教育・社会福祉のマルチベネフィットで協働を仕掛けた着眼点が素晴らしい。[3] ● 森林保全と就労支援の両立、ステークホルダーの拡大。[3] ● 他分野の提案をうまく取り入れ協働している。[3] ● 福祉と森林でイノベーションをおこすアイデア(課題どうしのかけあわせ)。[3] ● 地域の持続可能性を具体的に考えている。[5] ● 少子高齢化の中心的な課題に対して、地域の人たちに機会を作り、参加するようにして、解決していること。[5] ● 森と福祉を繋げた。高齢者に火をつけた。[8] ● 林業企業と山林所有者の関係が活かされている。[8] ● 地域教材化への取組→協働プラットフォーム→行政との連携(環境教育施策)の好循環。[9] ● 環境にとどまらない、地域愛を育む取組を実践している点。[10] ● 島の活性化のために、藻場以外の事例にも転用できそう。[11] ● 環境保全+人材育成、両輪として解決を目指す取り組み。[11] ● 継続のための形・仕組みづくり、うまくいくと良いですね。[12] ● エコツアーで食と文化の発信をしている。[13] ● 環境と観光、環境と農業とつなげて対策を実施している。[15] ● 赤土問題を農家に責任を押し付けず、問題をプラスの活動になる協働関係をつくった。[15] ● 漁業者と農業者の協働→赤土を成果としてだけでなく、きっかけとして捉えている。[15] ● 横断的に具体的な市や村をステークホルダーに巻き込んでいる。[15] ● 農と漁の協働作業、他地域への拡大の実現。[15] ● 協働の輪が他の自治体にまで広がり、広域での取り組みになっている。[15] ● 環境・農業・漁業が協働。[15] ● 赤土対策を多様なアプローチからできる仕組みになったところがいい。[15] ● 行政の横断的な関わり。[16]
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 市民団体と行政の会議は、まとまらないという点に着目したのが良い。[1] ● 大学が中心にある事業は多くの他の大学にも、関心を持ってもらえる。[5] ● 小さな拠点の提案をもっていったのがいい。[5] ● 課題の洗い出しのみならず、その分類まで行うことは対策立案に効果的と感じた。[6] ● 若者への発信。[7] ● 自己変革したいシニアの気持ちは他のシニアにも勇気を与えると思う。[7] ● 企業人→地域人、という価値観の変化がいい。[7] ● 地元の林業会社が立ち上がったところ。[8] ● シニアの人々の多数参加が良い。[8] ● あきらめない心が地域を動かした。[8] ● ”ヨシ”というテーマが明確、理解されやすい。[9] ● 人材育成を含めたヨシ文化のワンストップサービスになりつつあること。[9] ● 環境教育の紹介先として県が推薦している。[9] ● 環境教育に地域の資源を入れたところ。[9] ● 一般の人が多角的な視点からヨシにアプローチできるような魅力を伝えている。[9] ● 体験教育の場づくりが良い。[9] ● 地域活性化に上手く環境教育を取組もうとしている。[10] ● 教育委員会の参加が良い→小学校の協力が得られた。[10] ● ダム、高速など環境教育とは一見結び付きにくい場での取り組みは興味深い。[10] ● 会社発案で協働をしようということがすばらしい。[11] ● アクセスの悪い島で協働の取り組みを始めたところ。[11] ● 物理的な距離、心理的な距離を乗り越えて取り組まれている姿勢が素晴らしい。[11] ● 将来の担い手のための環境教育。[11] ● 従来の取組を変革しようとする意識がすごい！[12] ● 「生物多様性の保全」が最重要目的ではあるものの、ステークホルダーには直接的なアプローチはせず、ステークホルダーは個々の目的に取り組みつつも結果的に最重要目的の達成に近づけているといった点が良い。[13] ● 旧村って早々になくならないですね。地域・広域地域っていう捉え方が視点として良いなと思いました。[13]

	<ul style="list-style-type: none"> ● 地元の宝を中心にしてやっている。[14] ● 地域の人がわかるもの『ササユリ』を核としたこと。[14] ● みんなが大切に思っている「ササユリ」がキーになっていること。[14] ● 現状分析＆『ササユリ』を中心にしたアイデア、素晴らしい着想。[14] ● 関係者のつながり、キーワードとしての『ササユリ』の使い方。[14] ● 島内と島外の関係性をつなぐササユリと信頼関係。[14] ● 村からの投資を県に広げた。[15] ● 県内(全体)の問題として広げている。[15] ● 竹問題についての一般市民への啓発。[16] ● 自治体に担当課がないところを、つなぐことで変えていった。[16] ● 協働により竹問題へ取り組むことで、対策が進み始めた。[16] ● 竹林オーナー制度。[16] ● 流域の取組への発展性[16]
--	---

[1](一財)北海道国際交流センター／[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会／[3](一社)あきた地球環境会議／[4]鶴岡市三瀬地区自治会／[5]駿河台大学／[6]辻又地域協議会／[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会／[8](株)柳沢林業／[9]ヨシネットワーク／[10]bioa(ビオア)／[11](有)日本シジミ研究所／[12](特活)うべ環境コミュニティー／[13]NPO 森からつづく道／[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議／[15](特活)おきなわグリーンネットワーク／[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

【表 2-8: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」評価(〔自立発展性〕)】

	いいね(+評価点)
対外の技術サービス活動	<ul style="list-style-type: none"> ● 組織内で「味方を増やす」意識と行動。[2] ● 調査アプローチに基づく島民の理解促進。[2] ● 生物の数の調整について新たな意見を把握するのがよい。[2] ● 猫ツアーを通じた環境教育。課題を解決に向けた教材にしているのが良い。[2] ● 子どもたちへのアプローチ手段としての、天売猫カードゲーム作成。[2] ● 具体的事業(木ハガキ)を参加のきっかけに、モチベーションにして協働、主体的参画につながっていったこと。[3] ● エコツーリズムの一步先を行くモデル。[5] ● 環境にとどまらない、地域愛を育む取組を実践している点。[10] ● 地域活性化に上手く環境教育を取組もうとしている。[10] ● 将来の担い手のための環境教育。[11] ● 若い人の担い手づくり。[11] ● ステークホルダーが、「環境教育の実践」と言う方向にまとまって向かっている点。[12] ● 先導的プレーヤーから、中間システム機能を有していく歴史的転換→「協議会設立」というゴール。[12] ● 継続のための形・仕組みづくり、うまくいくと良いですね。[12] ● 赤土問題を農家に責任を押し付けず、問題をプラスの活動になる協働関係をつくった。[15] ● 漁業者と農業者の協働→赤土を成果としてだけでなく、きっかけとして捉えている。[15] ● 赤土対策を多様なアプローチからできる仕組みになったところがいい。[15]
人材・組織・制度	<ul style="list-style-type: none"> ● 町・社協・NPO の「協定」は事業の継続のためになるので素晴らしい。[3] ● 協定として正式にシステムを作ったことで、今後も属人的にならずとも、取組を続けられるのは良いのではないか。[3] ● オーナー制度(里親)を作った点。[14]
財務	<ul style="list-style-type: none"> ● 理念だけではなく、経済面も考えている。[16] ● 経済的な視点が早くからある点。[16] ● 資金獲得にも展望を入れている。[16] ● 行政と産業のすき間としての「竹」を投資力でつないだこと。[16] ● 事業の収益性を確保することで事業の経済性と対話を高めることを目指している。[16] ● 企業からの資金の引き出し。[16]
技術(運営・管理、技術開発)	<ul style="list-style-type: none"> ● 学生が島民へ聞き取り、信頼関係、仲間意識、想いをはき出す。[2] ● 協定書の締結による関係性の変容。[3] ● 社団法人の誕生が素晴らしい。うまく巻き込んで進められたように感じられました。[5] ● 法人格をもった団体をつくることで目的が統一されたように思う。[5]
共有のミッション、ブランド化	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域との合意形成により、持続的な活動へつながる。[2] ● 地域の課題から地域振興につながっている。[2] ● 出発点から問題意識、危機感の共有があった。[4] ● 課題の明確化がなされており、それに対応した取組を適切に取っていたように感じられた。[4] ● 地域の持続可能性を具体的に考えている。[5] ● ステークホルダーが自分事として考えられるようになってきている。[7] ● 地域愛をベースに、明確なビジョンをもとに事業を進めていること。[9] ● 自分たちの目標(生物多様性の保全)ばかり主張するのではなく、大きなスパイラルで理解を得た。[13]

	<ul style="list-style-type: none"> ● 県内(全体)の問題として広げている。[15] ● 協働の輪が他の自治体にまで広がり、広域での取り組みになっている。[15] ● 観光コースに組み込むなど問題となっている竹を地域ブランドにしている。[16]
政策協働	<ul style="list-style-type: none"> ● 七飯町の政策に反映されようとしている。[1] ● 協働事業方針が市の施策に沿って連動している。[5] ● 市の方針に合わせた取組。[10]
協働体制	<ul style="list-style-type: none"> ● 協働の取組にありがちな会議の遅延打開を図っている点。[1] ● 会議の場によりできた関係が今後の活動につながると感じた。[1] ● 島のひととの交流を通してそれぞれの立場で、問題の解決に向けて明確にしていると思われた。[2] ● まず現場を見る。地域のひととの交流会。[2] ● 就労訓練者が活躍する場、機会。[3] ● 就労訓練からアプローチしている点がいい。[3] ● ステークホルダーの皆の協力体制がすばらしい。[4] ● 地道な信頼関係づくり。[6] ● 淋しいシニア部落に「地域の人々の参加」を創るその挑戦力はすごい。地域住民との信頼関係構築に分けて、意見交換の場をつくり、情報収集をしてそれぞれが課題を認識して、自分たちで改善していくようにしていること。[6] ● 超高齢地区で住民を動かした仕掛け。[6] ● 地域教材化への取組→協働プラットフォーム→行政との連携(環境教育施策)の好循環。[9] ● パートナーの組織化→継続性の向上。[12] ● 「生物多様性の保全」が最重要目的ではあるものの、ステークホルダーには直接的なアプローチはせず、ステークホルダーは個々の目的に取り組みつつも結果的に最重要目的の達成に近づけているといった点がよい。[13] ● ステークホルダー内の担当者が変わっても事業進行している。[13] ● 島外からの協力者を増やす、「外から支える」仕組み。[14]
ビジネスモデルの構築	<ul style="list-style-type: none"> ● 全国に広がるモデルとなる。[2] ● ものづくりを通じたコミュニケーションの活発化、主体となる人々のやる気効果。[3]
共働性	<ul style="list-style-type: none"> ● 楽しいことをしようということが次々と広がった。[5] ● 「楽しくやる」ことは大切。[5]
全体	<ul style="list-style-type: none"> ● ステークホルダーが集まった会議で、主体的発言をするように進んだことがいい。[3] ● 訓練によってやる気があがることはすばらしい。[3] ● 経済試算とデータは強い。[4] ● 自治会ならではの連携の良さを感じた。1.1億円の試算を出し、目標を設定したのがいい。[4] ● 具体的な数値がでることで取組につながる。[4] ● 試算にきっちり向き合っている。[4] ● 非常に多様なステークホルダーが最初から協力的で地域の理解もあってうらやましい。[4] ● 皆さんが一同に協力的な点はすごい財産。[4] ● 都度自己課題を確認(=評価)して新ステークホルダーに関わってもらっていることはすごい。[4] ● 小さな拠点の提案をもっていったのがいい。[5] ● つながりの見える化。[5] ● ステークホルダーの変化。流れがよいと感じた。[6] ● “呼ばれたから来る”ステークホルダーの主体性に着目した。[6] ● 地域のひととのつなぎ役として円滑にしている。[6] ● 地道な説明。あせらない活動。[6] ● 冷たい反応にもめげずに粘り強くワークショップを重ねた点。[6] ● 自分事になった。[7] ● シニアが自己の変容も意識して自ら動き始めた。[7] ● 実践することで人を動かす、説得する、意識を変える。[7] ● 自己変革したいシニアの気持ちよく他のシニアにも勇気を与えると思う。[7] ● 柳沢林業さんの担当者の「変化」。[8] ● 社会変容を通して自己変容の姿。[8] ● 活動の幅が広がったことで、地域住民を巻き込もうとして変わっていることの気づき。[8] ● 会議の場が丸くなった。[8] ● あきらめない心が地域を動かした。[8] ● あきらめていた村の人たちのやる気を出していったところ。[8] ● プレストやワークショップに対する抵抗をあきらめない。[8] ● 環境教育の紹介先として県が推薦している。[9] ● プラットフォーム化したもの(しくみ)を県が活用しているのはいいね！[9] ● 主体性を持った若手がさらに次を考えているのはよい。[11] ● けん引役の育成を考えて活動しているところ。[11]

	<ul style="list-style-type: none"> ● ESDの取り込みの視点はいい。[11] ● はっきりした役割分担。[14] ● 企業との役割分担を行っているところ。[14] ● 資金の問題を考慮しているところ。[14] ● 地元の宝を守るのに企業の協力を得るという発想がいい。[14] ● スポンサー獲得は大事。[14] ● オフィシャルに窓口が見えた。[16] ● 新たに参加したメンバーの逆提案が興味深い。他の団体も公表しようという。[16] ● 逆提案を引き出していったこと。[16]
--	---

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ビオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

4. 「協働ガバナンス」の評価(個別案件)

本章では、協働ギャザリング 2017(年度末報告会)参加者による「協働ガバナンス」(協働)に関する評価コメントに基づいて、考察を述べることにする。詳細については、【表付録3-1:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」(事業)／「協働ガバナンス」(協働)の有効性(プラス評価点)】を参照されたい。なお、今後の各協働取組の「協働ガバナンス」(協働)に関する効果的・効率的実施にむけた提案・改善の詳細については、【表付録 3-2:協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「プロジェクト・マネジメント」／「協働ガバナンス」の提案・改善点】を参照されたい。

昨年度の報告書(佐藤、2016)⁷の【第四章:実証研究編—継続案件事例に見られる「協働ガバナンス」の比較】や本報告書からも分かるとおり、各協働取組の「協働ガバナンス」は多様であるといえよう。[開始時の状況]においては、軋轢の歴史や参加の制約がありつつも、さまざまな取組を通して参加の誘発を行っている。[運営制度の設計]においては、多くの協働取組事例が協働取組の運営と設計に多大な配慮を行っていることも見受けられる。[協働のプロセス]においては、協働のスパイラルを回しつつも、関係主体どうしでの価値共有、進捗評価、そして相互の学び合い(「社会的学習」)が見られる。チェンジ・エージェント機能を有する「中間支援組織」においては、これら全体の「協働ガバナンス」に大きく関与しており、個々において、[変革促進]、[プロセス支援]、[問題解決提示]、[資源連結]を、能動的、受動的に実施している点も読み取れる。

4.1. 協働取組の[開始時の状況]の評価

[開始時の状況]においては、多くの[軋轢の歴史]・[協力の歴史]・[非協力の歴史]や[パワー・資源・知識の非対称性]が見られる(表 2-9)。[非協力の歴史]においては、[3](一社)あきた地球環境会議の取組に見られるように、森林活用、環境教育、社会福祉などのように、従来の縦割りによる協力をそもそもしてこなかった事例もある。また、[15](特活)おきなわグリーンネットワークのように、農家と漁業者の[軋轢の歴史]があるなかで、その関係性が再構築されてきた事例も見られる。

このような非協力や軋轢の歴史がある一方で、[協力の歴史]も見られる(表 2-9)。とりわけ、[1](一財)北海道国際交流センターの取組のように、地域資産として歴史と文化との関連づけ、地域の長所だけでなく、課題点も明確にし、その課題をも共有したうえで継続的に協力をしている事例(昨年度からの継続案件)、[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組のように、島民の意見を最大限に尊重し、その感情、意見を踏まえて、対話(交流)の機会やネットワークを継続的に構築している事例(昨年度からの継続案件)、[3](一社)あきた地球環境会議の取組のように、森林活用、環境教育、社会福祉のマルチベネフィットに配慮をし、従来の非協力の歴史を超えて、協働のしくみを継続的に構築している事例(昨年度からの継続案件)、[4]鶴岡市三瀬地区自治会の取組のように、協働取組の開始当初から、地域における課題認識や危機感を共有している事例、[8](株)柳沢林業の取組のように、地域愛をベースに、明確にビジョンを示すことで、開始時の状況を整理している事例、[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議の取組のように、昔のササユリの保全の様子を見せることで、埋もれていた関係性と協力の歴史を掘り起こし、開始時の状況を整理している事例、も見られる。[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議の取組のように、過去の歴史がどのようなようであったかが、今日、十分認識されていない事例も見られる。過去の歴史を紐解くことが、開始時の状況を整理することにもつながると言えよう。

⁷ 佐藤真久, 2016, 「平成 27 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業—[継続案件の多角的考察]と[協働ガバナンスの事例比較]に焦点を置いて」, 平成 27 年度環境省地域活性化を担う環境保全活動の協働取組推進事業, 『最終報告書』

4.2.協働取組の[運営制度の設計]の評価

[運営制度の設計]においては、大きく分けて、[広範なステークホルダーの包摂]、[討議の場の唯一性]、[明確な基本原則]、[プロセスの透明性]、の視点から考察を行う(表 2-9)。

[広範なステークホルダーの包摂]においては、[1](一財)北海道国際交流センターの取組のように、ユースや女性の積極的な参画を促し、また、地域内外の大学と協働している事例(昨年度からの継続案件)、[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組のように、島特有の人間関係に配慮をし、島外よりも、島内のステークホルダーの包摂に配慮をしている事例(昨年度からの継続案件)、[3](一社)あきた地球環境会議の取組のように、森林活用・環境教育・社会福祉といった個々の異なるビジョンを尊重しつつ、場と機会を有効に活用し、個々の課題を共有し補完することで、相乗効果を追求している事例(昨年度からの継続案件)、[4]鶴岡市三瀬地区自治会の取組のように、町内会を単位とし、自治体の積極的な参加と、多様なステークホルダーの包摂を促している事例、[5]駿河台大学の取組のように、今日までの多様なステークホルダー(大学含む)の参画基盤を活用している事例、[6]辻又地域協議会の取組のように、超高齢地区の住民の参画を促し、行政、NPO、地域おこし協力隊、大学などの地域内外のステークホルダーを包摂している事例、[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会の取組のように、シニア層の参画を積極的に促している事例、[8](株)柳沢林業の取組のように、地元住民、都市住民、福祉・医療関係者などを巻き込み、また、地域の林業企業と山林所有者の参画を促している事例、[9]ヨシネットワークの取組のように、多様な経験を有するボランティアの個人・団体、企業、行政の参画を促している事例、[10]bioa(ビオア)の取組のように、環境 NPO、行政、地域、学生団体、学校の参画を促しているだけでなく、行政内(茨木市役所)における様々な部課署の参画を促している事例(昨年度からの継続案件)、[11](有)日本シジミ研究所の取組のように、島特有の人間関係に配慮をし、島外よりも、島内のステークホルダーの包摂(島町の漁業関係者、水産高校、研究者、行政ら)に配慮をしている事例、[12](特活)うべ環境コミュニティーの取組のように、行政、企業、教育委員会(各小学校、学童保育)などとの参画を促している事例、[13]NPO 森からつづく道の取組のように、テーマを生物多様性保全としているものの、持続可能な社会づくりにその視点を広げることにより、他分野の多様なステークホルダー(事業者、小学校など)を包摂している事例(昨年度からの継続案件)、[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議の取組のように、島特有の人間関係に配慮をしつつ、オーナー制度(里親)などの活かすことにより、島外と島内を協働のシンボルとなる「ササユリ」の保全にむけて関係者(企業含む)をつなげている事例、[15](特活)おきなわグリーンネットワークの取組のように、横断的に市や村をステークホルダーに巻き込んでいる事例、島外からの協力者を増やしている事例(昨年度からの継続案件)、[16](特活)筑後川流域連携倶楽部の取組のように、竹林環境にむけた大学との連携や、行政の横断的な関わりの促進、議員の協力を仰いでいる事例、などが見られる。

[討議の場の唯一性]においては、具体的な指摘がなかったものの、行政横断的、分野横断的な討議の場は、唯一性を有しているといえる。具体的には、[3](一社)あきた地球環境会議の取組のように、森林活用・環境教育・社会福祉の協働プラットフォームの場を活かしている事例(昨年度からの継続案件)、[10]bioa(ビオア)の取組のように、茨木市行政間のつながり、縦割り行政、ヨコの仕組みづくりを構築している事例(昨年度からの継続案件)、[12](特活)うべ環境コミュニティーの取組のように、歴史ある多様なステークホルダーを包摂した環境教育の実践(字部方式)事例、[15](特活)おきなわグリーンネットワークの取組のように、赤土対策から協働取組を開始しつつも、県内外の多様なステークホルダーを包摂した持続可能な地域づくりを構築している事例(昨年度からの継続案件)、などが見られる。このような、異質性の高い関係主体を巻き込んだ場づくりは、他の協働取組においても見られており、その場づくりの難しさと、複雑な課題に対する関係者主体からの期待を踏まえ、協働のスパイラルを深化させるものとして重要な機能を有していると言えよう。

[明確な基本原則]においては、[1](一財)北海道国際交流センターの取組のように、内部外部の人のかわりがスムーズになるように会議の進め方においても役割を明確にして意見の出しやすいようにしている事例(昨年度からの継続案件)、[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組のように、課題を分析しっぱなしでなくそれを分りやすく様々な関係者に説明し、主体的な参加者、理解者を増やしている事例(昨年度からの継続案件)、[13]NPO 森からつづく道の取組のように、自分たちの目標(生物多様性の保全)ばかり主張するのではなく、大きなスパイラルで協働取組への理解を促している事例(昨年度からの継続案件)、[明確な基本原則]においても、ビジョンやミッションに基づくものや、対話と協働にかかる手続き的な方法に関するものなど、多様性が見られる。

[プロセスの透明性]においては、ネットワーク活動の報告書の発信などが見られており、公開性、対話性、透明性のアプローチは、他の協働取組においても重要な作業であるといえよう。

4.3.協働取組の[協働のプロセス]の評価

[協働のプロセス]においては、大きく分けて、[膝詰めの対話]、[信頼の構築]、[プロセスへのコミットメント]、[共通の理解]、[中間の成果]の視点から考察を行う(表 2-9)。

[膝詰めの対話]においては、[1](一財)北海道国際交流センターの取組のように、島の人の声を聞き、感情を理解したうえでネコ問題とドブネズミ対策の両立を図っている事例(昨年度からの継続案件)、[8](株)柳沢林業の取組のように、あきらめていた村民たちに対して、根気よく対話の場をつくり続け、村民たちのやる気を向上させている事例、[15](特活)おきなわグリーンネットワークの取組のように、地域の方との膝詰めの対話(交流会の開催など)を重視している事例も見られる。

[信頼の構築]においては、従来のインフォーマルな交流機会のほか、[6]辻又地域協議会の取組のように、地域住民との信頼関係構築に向けて、意見交換の場をつくり、情報収集をしている事例、[13]NPO 森からつづく道の取組のように、行動の時間を共有することにより、団体と市の信頼関係を構築している事例、[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議の取組のように、学校・地域に外から関わる際の信頼関係づくりに大きな配慮をしている事例、[15](特活)おきなわグリーンネットワークの取組のように、赤土問題を農家に責任を押し付けず、問題をプラスの活動になるように、具体的な取組を提示、実施している事例(昨年度からの継続案件)、などが見られる。[膝詰めの対話]と[信頼の構築]は深くリンクしているものであり、採択された協働取組すべてにおいては、その協働プロセスを見ることができ、持続可能で包容的な地域づくりに向けた協働のプロセスとして、重要であるかをうかがうことができる。

[共通の理解]においては、[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会の取組のように、協働取組を通して発行されている「天売猫だより」は、情報伝達以上の役割を最初から目的にしており、問題提起と共通認識作りの役割があるとしている事例(昨年度からの継続案件)は、対立構造をなくし、多様なステークホルダーの参画を強化する上でも、重要な示唆を与えている。[3](一社)あきた地球環境会議の取組のように、町・社協・NPO により「協定書」を締結している事例(昨年度からの継続案件)は、相互の共通理解を促す上で重要な役割を有しているといえよう。また、[13]NPO 森からつづく道の取組のように、行動の時間を共有することにより団体と市とが信頼関係を構築している点も、共通の理解を深めるうえで有効であるといえよう。

[中間の成果]においては、その中間の成果が共有化されることにより、実施する協働取組の有効性を感じることが可能になり、その結果、次の[協働のプロセス]のスパイラルにむけた成果も見られつつある。[1](一財)北海道国際交流センターの取組のように、会議の場によりできた関係性が今後の活動につながる点を強調している事例(昨年度からの継続案件)からも、協働プラットフォームの構築とその成果の共有(関係性の構築含む)が、重要であることを読み取れよう。また、[13]NPO 森からつづく道の取組のように、協働プロセスと社会的学

習プロセス(ふりかえり)を連関させている事例(昨年度からの継続案件)は、中間成果の共有を、次の協働スパイラルを回転させている有効な取組であると言えよう。

【表 2-9: 協働ギャザリング参加者の評価コメントに基づく「協働ガバナンス」評価】

「協働ガバナンス」(協働)	開始時の状況	<ul style="list-style-type: none"> ● 大沼のいい所だけではなく課題点もしっかり見てもらおうようにしている。[1] ● 地域資産として歴史と自然文化との関連づけ。[1] ● 歴史とかまで踏み込んで幅広く深く取り込んだこと。[1] ● 島民の気持ちを優先したプロジェクト。ネコ問題をきっかけに対話(交流)する機会やネットワークが生まれた。[2] ● 島の人の声を聞き、感情を理解したうえでネコ問題とドブネズミ対策の両立を図っていた。[2] ● 森林活用・環境教育・社会福祉のマルチベネフィットで協働を仕掛けた着眼点が素晴らしい。[3] ● 同床異夢でも連携。[3] ● 出発点から問題意識、危機感の共有があった。[4] ● 台風になる人材がいることで地域が動くと感じた。[5] ● キーパーソンを核に据える求心力いいね。[5] ● 冷たい反応にもめげずに粘り強くワークショップを重ねた点。[6] ● 自己変革したいシニアの気持ちは他のシニアにも勇気を与えると思う。[7] ● 企業人→地域人、という価値観の変化がいい。[7] ● 幅広い関係者に働きかけ、共有段階を丁寧に進めている点。[8] ● 地域愛をベースに、明確なビジョンをもとに事業を進めていること。[9] ● 茨木市行政間のつながり、縦割り行政、ヨコの仕組みづくり。[10] ● アクセスの悪い島で協働の取り組みを始めたところ。[11] ● 物理的な距離、心理的な距離を乗り越えて取り組まれている姿勢が素晴らしい。[11] ● 産官学民とした向上の対策が難しいながらも取り組んでいるところ。[12] ● 先導的プレーヤーから、中間システム機能を有していく歴史的転換→「協議会設立」というゴール。[12] ● 自分たちの目標(生物多様性の保全)ばかり主張するのではなく、大きなスパイラルで理解を得た。[13] ● 「生物多様性の保全」が最重要目的ではあるものの、ステークホルダーには直接的なアプローチはせず、ステークホルダーは個々の目的に取り組みつつも結果的に最重要目的の達成に近づけているといった点が良い。[13] ● 昔語りの縁が大事だと思います。[14] ● ヨソ者の理想だけを押し付けてないところがいい。[14] ● 昔のササユリの様子を見せて、埋もれていた関係性を掘り起こしたこと。[14] ● 農家と漁業者、対立から協働作業へ変えたこと。[15] ● 自治体に担当課がないところを、つなぐことで変えていった。[16]
	運営制度の設計	<ul style="list-style-type: none"> ● アカデミック+地域へのアプローチ。[1] ● 難しい水質問題に対して、アカデミックの意見を取り入れると課題と解決が見えてくる。[1] ● 外部の意見を入れてきたのは新しい視点が入っている。[1] ● 内外のつなぎ役がいることで、内目線と外目線がリンクする。[1] ● 人間関係にメス！を入れる。[1] ● 内部外部の人のかわりかスムーズになるように会議の進め方においても役割を明確にして意見の出しやすいようにしている。[1] ● スムーズかつ参加度の高い会議進行のための作戦がいくつもあることがよい。[1] ● いろんな作戦にネーミングしているのがいい。[1] ● 課題をしっかりと話し合い、違う世代の意見を取り入れた。[1] ● これまで関わっていた主体を尊重しながら、会議を分けるなどして効率的に実施した点。[1] ● ラムサール女子会などの女性を入れることにより会議の進め方が変わってくる。[1] ● ユースと女子会がいい。[1] ● 漁協＝背広を着たオジサンイメージ。女子を入れるのはいいですね。[1] ● 若い力と女子の力、外人パワーなど、アオコ問題に異種若者を投入した活力はすばらしい。[1] ● 人間模様を改善させるシナリオ。[1] ● 場をつくる、言葉をつくる、良い。[1] ● 課題の設定が明確でよい。[2] ● 島民密着型の取組方法。[2] ● 様々な会議の体系がよい。相手に応じた対応をしている。[2] ● ツール(天売猫だより)づくりと話し合える場(連絡会)でネコに対する意識を変化させた。[2] ● 島民の意思を反映、抽出する場づくり+情報発信(天売猫だより)。[2] ● 課題を分析しっぱなしでなくそれを分りやすく様々な関係者に説明し、主体的な参加者、理解者を増やしている構図がとても明快。[2] ● 連絡会といいつつ決める場の設定。[2] ● 「人と海鳥と猫が共生する天売島」ビジョンの構築。[2] ● 海鳥とノラネコの共生という発想がおもしろい。[2] ● 「異業種交流」という着眼点(整理の仕方)がおもしろい。[3]

- 森林活用・環境教育・社会福祉のマルチベネフィットで協働を仕掛けた着眼点が素晴らしい。[3]
- 同床異夢でも連携。[3]
- アプローチ方法を異業種交流と位置付けたことでパートナーの考え方が広がった。[3]
- 自治体を動かしてコアメンバーになってもらったのがすごい。[3]
- 他分野の提案をうまく取り入れ協働している。[3]
- 福祉と森林でイノベーションをおこすアイデア(課題どうしのかけあわせ)[3]
- 夢物語ではなくしっかり調査をされている。[4]
- 経済試算とデータは強い。[4]
- 自治会ならではの連携の良さを感じた。1.1億円の試算を出し、目標を設定したのがいい。[4]
- 具体的な数値がでることで取組につながる。[4]
- 試算にきっちり向き合っている。[4]
- 町内会単位でこれだけたくさんの方のステークホルダーを巻き込んでいるのはすごい。[4]
- 狭い中での地域の理解がうまくいっている。[4]
- ゆるやかなつながりに共感します。[4]
- ステークホルダーの皆の協力体制がすばらしい。[4]
- ゆるやかな協議会→多様なマルチステークホルダーによる役割分担。[4]
- 役割分担(自治会、行政、教育委員会)が上手くできている。[4]
- 1.1億円分のエネルギーをバイオマスにおきかえる、という目標がわかりやすい。[4]
- 分野横断的かつ行政の協力が得られているところが良い。[4]
- 今あるステークホルダーを活用した。[5]
- 多くの関係者をまきこんでいるところはよい。[5]
- 自分たちの活動から地域の人たちの巻き込みへの拡大プロセス。[5]
- つながりの見える化。[5]
- 大学による課題の捉えなおし、“持続可能性”への次元に向上させた。[5]
- 目的の共有→課題解決の加速化。[5]
- 「地域の人が主体で考える」ための場づくりは大切な要素。[6]
- 外の人が住民を引っ張り出してよいと思う。[6]
- 超高齢地区で住民を動かした仕掛け。[6]
- 「インセンティブが大切」に共感。[7]
- シニアのニーズをつかんだことが良かった。[7]
- 村の人たちを巻き込んだ取組がよい。[8]
- 幅広い関係者に働きかけ、共有段階を丁寧に進めている点。[8]
- 林業企業と山林所有者の関係が活かされている。[8]
- プラットフォームを作る体制づくりとエコツアー、環境学習をつなげていったこと。[9]
- 地域愛をベースに、明確なビジョンをもとに事業を進めていること。[9]
- 人材育成を含めたヨシ文化のワンストップサービスになりつつあること。[9]
- 新しいプログラムがみんなの力と知恵と思いで作られている。[9]
- 環境教育に地域の資源を入れたところ。[9]
- 未来のために今何をすべきかについて明確にわかるようになっている。[10]
- 課題を明確にして、計画に反映していること。[10]
- 課題を明確にして始めた。[10]
- 茨木市行政間のつながり、縦割り行政、ヨコの仕組みづくり。[10]
- 市のいくつかのセクターとつながった。[10]
- 行政の関連した部署と関わっている。今後繋がるほしい。[10]
- 教育委員会の参加が良い→小学校の協力が得られた。[10]
- 学生団体を巻き込んで新しい発想や行動力を得た。[10]
- 課題が明確でよい。協働における「人間関係構築の壁」。[11]
- 既に活動している組織との連携。[11]
- ステークホルダーを有機的につなげようとしているところ。[11]
- 協働の課題が整理されているので、解決に必要なステークホルダーがわかりやすい。[11]
- ステークホルダーが、「環境教育の実践」と言う方向にまとまって向かっている点。[12]
- 行政、企業、その他団体が具体的に取り組むことができている。[12]
- 産官学民とした向上の対策が難しいながらも取り組んでいるところ。[12]
- 体制づくり。多くの団体をまとめた。[12]
- 宇部方式による推進が良い。[12]
- 企業サイトの活用、企業の環境教育への参加は重要。[12]
- 地域資源としての工場の活用(企業の巻き込み)。[12]
- 教育委員会の参加(各小学校、学童保育)。[12]
- 多様なリソース(場、組織)の活用。[12]
- 自分たちの目標(生物多様性の保全)ばかり主張するのではなく、大きなスパイラルで理解を得た。[13]

	<ul style="list-style-type: none"> ● テーマとして生物多様性に注目していること。[13] ● 目標が明確でぶれない活動を保障している。[13] ● 小学校が加わると楽しみも増える。[13] ● 外の人の視点が地域の良いところを地元の人に気づかせる。[13] ● 事業者が多数参画している。[13] ● 個々の活動をつなぎ、広げていった手法はいい。[13] ● 他分野のネットワークの接続。[13] ● 地元の宝を中心にしてやっている。[14] ● 地域の人がわかるもの『ササユリ』を核としたこと。[14] ● みんなが大切に思っている「ササユリ」がキーになっていること。[14] ● ササユリというシンボルによる結集(求心力)。[14] ● 島内と島外の関係性をつなぐササユリと信頼関係。[14] ● 伊島というアクセス環境が悪い地域、島という閉鎖的な環境において、島の方々としっかりとした関係性が築けていて素晴らしい。[14] ● 住民共通の大切なものをきっかけとして、連携しているところがよい。[14] ● 昔語りの縁が大事だと思います。[14] ● 昔のササユリの様子を見せて、埋もれていた関係性を掘り起こしたこと。[14] ● ヨソ者の理想だけを押し付けてないところがいい。[14] ● はっきりした役割分担。[14] ● 企業との役割分担を行っているところ。[14] ● オーナー制度(里親)を作った点。[14] ● 島外からの協力者を増やす、“外から支える”仕組み。[14] ● コアメンバーに自治体関係者を入れ活動を拡大。[15] ● 持続可能な地域コミュニティの視点が良い。[15] ● 赤土対策はきっかけという観点で、赤土対策→持続可能なコミュニティにつなげている。[15] ● 農家と漁業者、対立から協働作業へ変えたこと。[15] ● 横断的に具体的な市や村をステークホルダーに巻き込んでいる。[15] ● 農と漁の協働作業、他地域への拡大の実現。[15] ● 修学旅行など多くの人を知る機会づくり。[15] ● 多面的な協働でつながっている。(農＝漁＝行政＝環境学習＝観光のつながり)[15] ● ビジョンが明確。[15] ● テーマ設定が具体的に切実で、活動の解決効果も見やすく納得感がある。[15] ● 自治体に担当課がないところを、つなぐことで変えていった。[16] ● 行政の横断的な関わり。[16] ● 現場の方と自治体に横串を指している。[16] ● 議員(住民)の協力。[16] ● 多くの課題→整理→ネットワークづくりの流れがいい。[16] ● いろいろな分野の関係者によるコミュニケーションの場をつくった。[16] ● モデル形成のためのパートナーシップづくり。[16] ● 企業からの資金の引き出し。[16] ● 林業の会社を中心となってコーディネートされている。[16] ● 観光コースに組み込むなど問題となっている竹を地域ブランドにしている。[16] ● 竹林オーナー制度。[16] ● 大学との竹林研究連携。[16]
<p style="text-align: center;">協働の プロセス</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 200 件のアンケート調査を通じたニーズ分析がいい。[1] ● 科学を取り入れながら楽しい活動をしている。[1] ● 外部と内部のつなぎにアオコ問題をとりあげたところ。[1] ● 外部の人に現場をきちんと見て意見をもらえるようにしたこと。[1] ● キーマンだけど難しい人に参画してもらうための会議戦略がすごい。[1] ● 楽しく多くの人たちを集めている。[1] ● 個々人の承認欲求を考えるとマッチングのポイント。[1] ● 市民団体と行政の会議はまとまらないという点に着目したのが良い。[1] ● 協働の取組にありがちな会議の遅延打開を図っている点。[1] ● 七飯町の政策に反映されようとしている。[1] ● 会議の場によりできた関係が今後の活動につながると感じた。[1] ● マルチステークホルダーの取り組みの元気がいい印象。[1] ● 多様な人々に参加してもらってプラットフォームづくりができています[1] ● いろいろな作戦を立てたところは良いと思います。1つでは、つまる可能性が大きい。[1] ● 中間支援団体がハブとして機能できている(本気だが実ははむずかしい)。[1] ● 課題が推移していることに対応して、鳥→猫→ネズミ→島民のつながりを作っている。[2] ● 取組によって生じた新たな課題についてもきちんと向き合おうとする姿勢が良い。[2]

- ノラネコ獲ったらドブネズミが増えた、が出発点となり、問題把握の発想がすばらしい。[2]
- ネズミが増える等、次の不具合への対策がよいと思う。[2]
- 一年目の成果、課題を受けて、「住民・島民」対象の活動(連絡会)に力を入れたことはよい。[2]
- 島の人の声を聞き、感情を理解したうえでネコ問題とドブネズミ対策の両立を図っていた。[2]
- 島民の気持ちを優先したプロジェクト。ネコ問題をきっかけに対話(交流)する機会やネットワークが生まれた。[2]
- 地元の意見に丁寧に答えている謙虚な姿勢は、この取り組みを持続的に続けるうえでよいと思う。[2]
- 島のひととの交流を通してそれぞれの立場で、問題の解決に向けて明確にしていると思われた。[2]
- 組織内で「味方を増やす」意識と行動。[2]
- 「猫だより」というツールはわかりやすそう。「みんなが手に取ってもらえる」工夫。[2]
- 「猫だより」は離島ならではの工夫で見習いたい。[2]
- 情報共有できるツール「天売猫だより」で思いが一つになった。[2]
- 島民への広報誌発行。ネコを好きな人とキラいな人をつなぐアイデア。[2]
- 「天売猫だより」対立構造にならないためのツール。[2]
- 天売猫だより。情報伝達以上の役割を最初から目的にしていた。問題提起と共通認識作り。[2]
- ネコをハブとした交流を上手にやっている。必ずしも猫を中心としないイベントを行い、いつの間にかネコ問題が進んでいる。[2]
- ツアー、島のひとに取り組みを知ってもらおうアイデア。[2]
- 多様な主体の様々な関心を活かした上で、天売島のアピールに効果的につなげていた。[2]
- ものづくりを通じたコミュニケーションの活発化、主体となる人々のやる気効果。[3]
- 会議への参加、関わり。積極性が“伝染”。[3]
- 具体的事業(木ハガキ)を参加のきっかけに、モチベーションにして協働、主体的参画につながっていたこと。[3]
- ステークホルダーが集まった会議で、主体的発言をするように進んだことがいい。[3]
- 協定書の締結による関係性の変容。[3]
- 町・社協・NPOの「協定」は事業の継続のためになるので素晴らしい。[3]
- 協定として正式にシステムを作ったことで、今後も属人的にならずとも、取組を続けられるのは良いのではないか。[3]
- 訓練によってやる気があがることはすばらしい。[3]
- 非常に多様なステークホルダーが最初から協力的で地域の理解もあってうらやましい。[4]
- 皆さんが一同に協力的な点はすごい財産。[4]
- 課題の明確化がなされており、それに対応した取組を適切に取っていたように感じられた。[4]
- 都度自己課題を確認(=評価)して新ステークホルダーに関わってもらっていることはすごい。[4]
- 社団法人の誕生が素晴らしい。うまく巻き込んで進められたように感じられました。[5]
- 法人格をもった団体をつくることで目的が統一されたように思う。[5]
- 小さな拠点の提案をもっていったのがいい。[5]
- 協働事業方針が市の施策に沿って連動している。[5]
- 地域の持続可能性を具体的に考えている。[5]
- ステークホルダーミーティングで課題認識ができたこと。[5]
- 少子高齢化の中心的な課題に対して、地域のひとたちに機会を作り、参加するようにして、解決していること。[5]
- 地域のひととつながるための行動力。[6]
- 当事者意識がわいてくるような対話のプロセスデザイン。[6]
- 地域のひととの信頼関係づくりの苦勞に共感。[6]
- 地域に入るための地道な取組いい。[6]
- 地区の運動会に参加。[6]
- 協力隊の活動報告会など、地域にとけこもうとしているところ。[6]
- 主体性をひきだす過程にいいね！[6]
- ステークホルダーの変化。流れがよいと感じた。[6]
- “呼ばれたから来る”ステークホルダーの主体性に着目した。[6]
- 超高齢地区で住民を動かした仕掛け。[6]
- 淋しいシニア部落に「地域のひと々の参加」を創るその挑戦力はすごい。地域住民との信頼関係構築に分けて、意見交換の場をつくり、情報収集をしてそれぞれが課題を認識して、自分たちで改善していくようにしていること。[6]
- 冷たい反応にもめげずに粘り強くワークショップを重ねた点。[6]
- 住民との共同作業で手伝う(住民に寄って)という切り口がよい。[6]
- 地域資源=マネー。他のステークホルダーがいない。気づき、改めて知る。[6]
- ステークホルダーが自分事として考えられるようになってきている。[7]
- 自分事になった。[7]
- シニアのひとたちの考え方、生き方を変えていく取組はすごいことだと感じた。[7]
- シニアが自己の変容も意識して自ら動き始めた。[7]

	<ul style="list-style-type: none"> ● 実践することで人を動かす、説得する、意識を変える。[7] ● 自己変革したいシニアの気持ちよく他のシニアにも勇気を与えると思う。[7] ● 柳沢林業さんの担当者の「変化」。[8] ● 社会変容を通して自己変容の姿。[8] ● 高齢の方もブレイクストーミングに参加している。[8] ● まず活動を通じて繋がりを作り、そこから意見を募る手法。[8] ● 活動の幅が広がったことで、地域住民を巻き込もうとして変わっていることの気づき。[8] ● 会議の場が丸くなった。[8] ● あきらめない心が地域を動かした。[8] ● あきらめていた村の人たちのやる気を出していったところ。[8] ● プレストやワークショップに対する抵抗をあきらめない。[8] ● 地域教材化への取組→協働プラットフォーム→行政との連携(環境教育施策)の好循環。[9] ● 繋がりの増加を実感できている。[10] ● 都市計画とあいまって多くのステークホルダーが関わって進められている。[10] ● 多様なステークホルダーとのつながりを作ったことはすばらしい。手法が気になる。[10] ● 島内からの提案を受けとってリードしている。[11] ● 地域の人にうまく火をつけたのは素晴らしい。[11] ● 島外からの提案が島民の気づきになったこと。[11] ● 誰も知らないところから、よくつなげている。「島」大変、エライ！[11] ● 藻場づくりと担い手づくりを一緒にやっているといいところがある。[11] ● 将来の担い手のための環境教育。[11] ● 環境保全+人材育成、両輪として解決を目指す取り組み。[11] ● 若い人の担い手づくり。[11] ● 主体性をもった若手がさらに次を考えているのはよい。[11] ● けん引役の育成を考えて活動しているところ。[11] ● ESDの取り込みの視点はいい。[11] ● 先導的プレーヤーから、中間システム機能を有していく歴史的転換→「協議会設立」というゴール。[12] ● パートナーの組織化→継続性の向上。[12] ● 継続のための形・仕組みづくり、うまくいくと良いですね。[12] ● 「やりたいこと」をやりつつ仕組化を目指すチャレンジ。[12] ● 関係者の協働への理解を進めるトライ。[12] ● 「生物多様性の保全」が最重要目的ではあるものの、ステークホルダーには直接的なアプローチはせず、ステークホルダーは個々の目的に取り組みつつも結果的に最重要目的の達成に近づけているといった点がよい。[13] ● 各セクターに問題意識を共有しようとしているのがいい。[13] ● 風早生きもん DAYSには多くのステークホルダーが参画している点がよい。[13] ● 外の組織を受け入れてもらうための内との関係構築。[13] ● 振り返りの時間を持てたことがよい結果につづく。[13] ● 必ず行う振り返りから次へつなげていっている流れがいい。[13] ● 協働プロセス⇔社会的学習プロセス(ふりかえり)いい。[13] ● 学校・地域に外からどう関わるか、信頼関係づくりをとっても大事にされている印象を受けました。[14] ● 中学校の参画が新鮮でした。住民にも寄り添っているようでよい雰囲気。[14] ● 島の「嫁」信頼関係の構築がスゴイ。[14] ● 活動が環境保全から地域のコミュニティーに大きなビジョンをもっているのがよい。[15] ● 赤土問題を農家に責任を押し付けず、問題をプラスの活動になる協働関係をつくった。[15] ● 漁業者と農業者の協働→赤土を成果としてだけでなく、きっかけとして捉えている。[15] ● 赤土対策を多様なアプローチからできる仕組みになったところがいい。[15] ● 協働により竹問題へ取り組むことで、対策が進み始めた。[16] ● 広い関係者に声掛けし、共有連携をていねいに行っている。[16] ● ノウハウを探ってアピールすることを目指している。[16] ● 新たに参加したメンバーの逆提案が興味深い。他の団体も公表しようといい。[16] ● 逆提案を引き出していったこと。[16]
--	--

[1](一財)北海道国際交流センター/[2]「人と海鳥と猫が共生する天売島」連絡協議会/[3](一社)あきた地球環境会議/[4]鶴岡市三瀬地区自治会/[5]駿河台大学/[6]辻又地域協議会/[7](一社)四日市大学エネルギー環境教育研究会/[8](株)柳沢林業/[9]ヨシネットワーク/[10]bioa(ピオア)/[11](有)日本シジミ研究所/[12](特活)うべ環境コミュニティー/[13]NPO 森からつづく道/[14]阿南市 KITT 賞賛推進会議/[15](特活)おきなわグリーンネットワーク/[16](特活)筑後川流域連携倶楽部

5. おわりに

本章は、本協働取組加速化事業に採択された協働取組(個別案件)において、「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価を行った(合同評価)。評価は、本協働取組加速化事業の終了時点で行うものではなく、年度末総括評価の実施にむけて(図 1-2)、昨年度の協働取組推進事業からの学びを共有しつつ、一連の検討会においては、「プロジェクト・マネジメント」の評価と「協働ガバナンス」の評価の関する議論を深めてきた。昨年度の経験を活かしつつ、本協働取組加速化事業の成果と課題を共有しつつ、来年度にむけた知見の蓄積を実施してきている。言い換えれば、地域社会の協働取組の更なる発展・展開にむけた PDCA のマネジメント・サイクルのスパイラルを、本協働取組加速化事業の関係者とともに実施しているといえよう。協働取組は、このように、個人の能力向上のみならず、採択団体(組織)の組織能力の向上、地域社会の関係主体(市民)の市民能力の向上をも要求される重層的で集合的な「社会的学習」のプロセスであるといえよう。

昨年度、今年度にわたる協働取組事業を通して、引き続き、上述するような個人、組織、市民の能力の向上に資する知見の蓄積をしていく必要がある。

おわりに

本最終報告書では、【はじめに／第一章：導入】において、本事業の概要と採択団体の協働取組概要が明記されているとともに、【第二章：実証研究編—個別案件・全体評価】では、年度末に開催された協働ギャザリング 2017(年度末報告会)に基づき、論点が整理されている。また、本協働取組加速化事業を通して、「中間支援組織」の機能向上にむけた、暫定的なチェックリストも開発されている(一連の最終報告書の改訂版)。詳細は、【付録 4:「中間支援機能」チェックリスト(改訂版 Version4)】を参照されたい。

なお、本最終報告書の作成においては、本検討会委員の島岡未来子博士(早稲田大学准教授)から多大な知見のインプットを得ている。この場を借りて深く御礼を表したい。

2017 年(平成 29 年)3 月 31 日

佐藤 真久

**－平成 28 年度環境省地域活性化に向けた協働取組の加速化事業－
最終報告書**

発行日： 2017 年 3 月 31 日

発行者： 一般社団法人環境パートナーシップ会議(EPC)

研究代表者： 佐藤真久

研究分担者： 島岡未来子

代表者連絡先： 〒224-0015 神奈川県 横浜市 都筑区 牛久保西 3-3-1

東京都市大学(旧武蔵工業大学) 環境学部 佐藤真久研究室

Tel: 045-910-2564 / Facsimile: 045-910-2605

E-mail: m-sato@tcu.ac.jp / masahisasato@hotmail.com